金武町の歴史と文化 第３集

伊芸のスナヒチ

2008年（平成20年）

金武町教育委員会

伊芸のスナヒチ

2008年（平成20年）

金武町教育委員会

巻頭言

平成18年8月20日、伊芸区民は16年ぶりの大きな喜ばしい興奮に包まれました。多くの方の注目を集める中、「伊芸スナヒチ」が盛大に挙行されたのです。

区民が一体となって取り組んだこの度のスナヒチには、足掛け2年におよぶ米陸軍都市型戦闘訓練施設に対する反対運動で大変な苦労をしてきた区民への感謝や労わり、また、区民の団結と融和をさらに強めたいという思いが詰まっていたと聞き及んでおります。

この度の伊芸スナヒチでは、そのような閉塞感を吹き飛ばそうという伊芸区民の心意気を内外に示すこともできたのではないか思います。

一方、前回のスナヒチから16年ぶりの開催となったということについては、伝統文化の継承という視点で考えた場合、大変有意義な区民全体の行事だといえます。

このスナヒチでは、実行委員会の組織結成から、網打ち係やトゥールバタ製作係等、各担当を配置し、区民が積極的に参加できる体制で実施されたものであり、網打ちでも老若男女を問わず、区民全員の総出で製作され、自分たちの網という意識ができたかと思います。

また、トゥールバタを先頭にミチジュネーから始まり、テービー合戦、ワカス合戦、スナヒチスープで最高潮に盛り上がり、区民の融和が図られた事と存じます。

本書では、今回のスナヒチについての報告のみでなく、昔のスナヒチに関する聞き取り調査の成果が合まれ、さらに、将来活用しやすいような資料をふんだんに盛り込むよう工夫いたしました。

本書が、単なるスナヒチの記録に止まらず、伊芸スナヒチが永きにわたって継承されるために、いくらかでも参考となればと思い、ここに発行いたします。

末尾ながら、調査や本書執筆にあたり、ご協力、ご指導を頂きました多くの伊芸区民、並びに関係者に厚くお礼を申し上げます。

2008年3月

金武町教育委員会
教育長 仲間 一

凡　例

1．本書は、『金武町の歴史と文化』第3集「伊芸のスナヒチ」とする。

　なお、これまで金武町教育委員会から刊行された『金武町文化財調査報告書』のシリーズ名を、『金武町の歴史と文化』に訂正し、より広い歴史・文化の領域を扱うこととし、あわせて、町民に親しまれる分かりやすい報告書づくりを目指すものとする。

2．本書は、2006年8月20日に行われた伊芸スナヒチを扱った。

3．調査体制は以下のとおり。

調査責任者　社会教育課長　仲田 實
調 査 員　町史・文化財係 主任　仲間淳一
調 査 員　町史・文化財係 主事　安座間 充
調 査 員　町史編さん嘱託員　宮平盛晃
調 査 員　文化財調査嘱託員　岸本利枝
調 査 員　学芸嘱託員　金城 忍
調 査 員　文化財係事務備人　安里由紀子

4．本書は宮平盛晃・安座間充・仲間淳一の共著によるものであり、図表作成は宮平盛晃・安里由紀子・金城忍・仲間淳一、第4章の囃子の採譜及び編集作業は仲間淳一が担当した。表紙デザインは安里由紀子、金城忍が担当した。

5．本書の執筆要領は、『標準編集必携』から適宜適用した。また、方言の表記はカタカナとした。敬称は、直接話しが聞けた話者には「さん」を、それ以外は「氏」を用い、大勢を一度に紹介する場合は敬称を省略した。

6．本文中で用いた図表は、将来、活用しやすいよう、詳細な図表を作成し、巻末の資料集に再録するよう努めた。

謝　辞

1．調査に際して、以下の方々をはじめ多くの伊芸区民にご協力及びご教示を頂きました。深く感謝申し上げます。

安富祖ミツ（大正2年生）
瑞慶村智廣（大正6年生）
瑞慶村智正（大正8年生）
本村シゲ（大正8年生）
登川松栄（昭和13年生）
上江洲徳幸（昭和18年生）
安富祖稔（昭和31年生）
池原政文（昭和31年生 区長）
伊波 学（昭和42年生 公民館職員）

2．調査及び本書執筆に際して、伊芸区長及び区事務所の職員の皆様に、情報提供、資料提供など特段のご配慮を頂きました。深く感謝申し上げます。

3．第1章「沿革」の脚注で扱った山里和尚の墓碑に見られる梵字の解釈については、金峰山観音寺（金武観音寺）住職元山善弘氏にご指導頂きました。深く感謝申し上げます。

4．第3章のワカスの衣裳については、(財)国立劇場おきなわ運営財団調査養成課の大城学氏及び田澗愛子氏に多くの助言を頂きました。深く感謝申し上げます。

目　次

第１章　伊芸の概要・・・・・・・・・・・・１

１.伊芸の概要…１ ／ ２.地勢…１ ／
３.沿革…２

第２章　伊芸スナヒチ序説・・・・・・・９

１.目的…９ ／ ２.期日…９ ／ ３.アガリ・イリの分け方…９ ／ ４.綱の銘柄…10 ／
５.綱引きの組織…11 ／ ６.伝承…13

第３章　綱引きの準備・・・・・・・・・・15

１.綱作り…15 ／ ２.道具の準備…18 ／
３.綱引き歌の練習…28

第４章　綱引き当日・・・・・・・・・・・29

１.綱引きの場所…29 ／ ２.ミチジュネー(綱引き行列)…29 ／ ３.綱引きの直前…35 ／
４.スナヒチスープ(綱引き勝負)…39 ／ ５.綱引き後の余興…41 ／ ６.祈願…42

第５章　綱の処分と余談・・・・・・・・・43

１.綱の処分…43 ／ ２.余談…43

「伊芸のスナヒチ」資料集・・・・・・・45

資料１ 伊芸の位置(詳細図)…46
資料２ 伊芸の地勢(航空写真との対照)…47
資料３ 伊芸の歴史年表…48
資料４ アガリ・イリの組織(役割と担い手)…49
資料５ 実行委員会会則…50
資料６ 綱作り…52
資料７ 綱と綱合わせ…53
資料８ ハタガシラ(詳細図)…54
資料９ アガリのトゥールバタ(詳細図)…55
資料１０ イリのトゥールバタ(詳細図)…56
資料１１ アガリ・イリの旗(詳細図)…57
資料１２ ミチジュネーのルート(戦前と現在)…58
資料１３ ミチジュネーの襷子(詳細)…59
資料１４ 綱引き歌の歌詞…60
資料１５ 当日までのスケジュール…62
資料１６ 当日のスケジュール…63
資料１７ 当日配布されたプログラム…64
資料１８ 新聞掲載記事…65

参考及び引用文献…67

巻頭目次

巻頭言… i
凡例… ii
謝辞… ii
目次… iii
図表目次… iv
写真目次… iv
巻頭写真　伊芸スナヒチ… v

コラム目次

コラム１ －南又島(フェーヌシマ)－…14
コラム２ －カミヤーを出たハタガシラー…21

図表目次

図1 - 1 伊芸の位置…1
図1 - 2 伊芸の地勢…2
図1 - 3 伊芸の略年表…4
表1 - 1 伊芸区の概要…7
図2 - 1 アガリ・イリの分け方…9
図2 - 2 伊芸スナヒチ実行委員会組織図…10
図2 - 3 アガリ・イリの組織…11
図3 - 1 綱打ちの場所…16
図3 - 2 綱…17
図3 - 3 カマチボウ…18
図3 - 4 ハタガシラ…20
図3 - 5 アガリのトゥールバタ…22
図3 - 6 イリのトゥールバタ…22
図4 - 1 綱引きの場所とミチジュネーのルート…29
図4 - 2 ミチジュネーの順序…30
図4 - 3 曜子のリズム…32

写真目次

写真1 - 1 現在のウイヌシマ…3
写真1 - 2 現在の平田原…3
写真2 - 1 アガリ…12
写真2 - 2 イリ…12
写真3 - 1 伊芸の水田…15
写真3 - 2 綱打ち(アガリ)…16
写真3 - 3 綱打ち(イリ)…17
写真3 - 4 カマチバン…18
写真3 - 5 ハタガシラのミチジュネー…20
写真3 - 6 アガリのトゥールバタ…23
写真3 - 7 イリのトゥールバタ…23
写真3 - 8 バーランクー…24
写真3 - 9 ドラガネ…24
写真3 -10 カネ…25
写真3 -11 プラ…25
写真3 -12 テービー…26
写真3 -13 ワカス(姉妹)の衣裳…27
写真3 -14 ワカス(謝名大主)の衣裳…27
写真4 - 1 ミチジュネー(アガリ)…30
写真4 - 2 ミチジュネー(イリ)…30
写真4 - 3 曜子係(アガリ)…31
写真4 - 4 ワカス(アガリ)…33
写真4 - 5 ワカス(イリ)…34
写真4 - 6 トゥール合戦(アガリ)…35
写真4 - 7 トゥール合戦(イリ)…35
写真4 - 8 イナグガーイー…36
写真4 - 9 テービー合戦…37
写真4 -10 ワカス合戦(アガリ)…38
写真4 -11 ワカス合戦(イリ)…38
写真4 -12 綱合わせ…39
写真4 -13 スナヒチスープ(イリ)…40
写真4 -14 スナヒチスープ(アガリ)…40
写真4 -15 カミヤーでの祈願…42

巻頭写真 伊芸スナヒチ

第１章 伊芸の概要

１．伊芸の概要

金武町は沖縄本島の中央部、東海岸側にあり、那覇市から北東へおよそ35ｋｍに位置する国頭郡の町である。東は宜野座村、北は恩納村、西はうるま市に接し、南は金武湾に面する。東西の長さはおよそ12ｋｍ、南北の長さは町の東側で７ｋｍ、西側で３ｋｍ、面積は37.75平方ｋｍであるが、そのうちおよそ60％が米軍基地であり、町土利用が大幅に制限されている。人口はおよそ11,000人、世帯数は約4,700で、字金武の金武区・並里区・中川区、字伊芸の伊芸区、字屋嘉の屋嘉区という３字と５行政区によって構成されている。

このうち伊芸は、面積が661ｈａで町土の約20％、人口はおよそ900人で町人口の約８％、世帯数は312、町の総世帯数の約７％と町では比較的小さい行政区であるが、近年は人口が一貫して増加傾向にある。農業が盛んで、水稲、さとうきび、田芋などが生産されており、旧公民館敷地にある「伊芸のがじまる」と、伊芸に伝わる伝統芸能の「南ヌ島」が町指定の文化財となっている。

２．地勢

伊芸は地図でみると町の中央よりやや西に位置する。東は沖縄自動車道の金武インターチェンジ、西は特養老人ホーム光が丘、北は恩納岳からザフン岳へと連なる山々の稜線で囲まれる範囲がおおまかな伊芸の領域である。東西におよそ3.5ｋｍ、南北に3.0ｋｍほどの広がりがあり、海岸沿の国道329号、山手に走る沖縄自動車道が主要なアクセス道路である。

字伊芸には屋敷原、親田原、平田原、ウフブチャ原、後原、上原原、川田原、クラシ

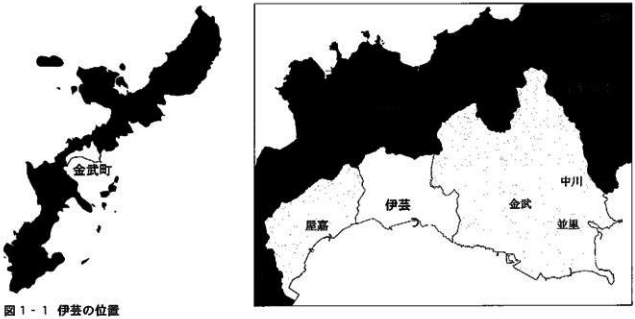


図１－１ 伊芸の位置

原、塩原、杣山、シッチ原、渡真利原、加武川原という13の小字がある。地目はおおむね、山林原野が9割、田畑が1割弱、宅地も1割弱という構成となっている。

山林原野のうち、およそ500haは、米軍用地である。この面積は字の面積の8割に相当し、金武町の中でも伊芸は著しく土地利用が制限されている。また、近年、米陸軍都市型戦闘訓練施設が伊芸の住宅地に近接して建設され、そこでの訓練に大きな不安を募らせている。

海岸沿いの砂丘とその後背湿地、及び周辺の微高地に、伊芸の美しい集落景観の特徴である水田に囲まれた宅地が広がる。

3.沿革

(1)先史時代

先史時代の伊芸をうかがい知ることのできる遺跡は、現在確認されているものとして伊芸遺跡および親田原遺物散布地、シッチ原遺物散布地の3ヵ所があり、これらは今から1,000～2,500年ほど前の集落遺跡である。

この頃の沖縄は、狩猟・漁労および採集を主とした貝塚時代と呼ばれる時期にあたり、これらの遺跡も海岸の近くや、美徳川が流れる低地に位置している。当時使われた土器や石器、あるいは食べたあとに捨てられた貝殻などが一帯に散布しており、先史時代の伊芸で営まれた集落の様子がうかがえる。

これらの次に古い遺跡は地元でウィヌシマと呼ばれる場所にある伊芸古島遺跡であるが、これは近世に属するもので、残念ながら伊芸ではグスク時代の遺跡は、まだ確認されていない。

(2)近世

近世になると伊芸について史料で確認することができるようになる。

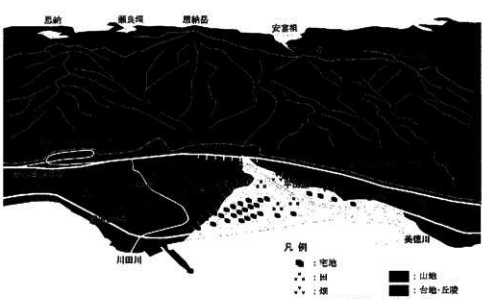


図1-2 伊芸の地勢

＊「琉球国高究帳」[『沖縄県史料前近代1首里王府仕置』所収]
† 「上り絵図郷村帳・琉球国高究帳・琉球国郷帳・宮古八重山両島絵図帳対照」[『琉球国絵図史料集第二集』所収]
‡ 安富祖一博『村の記録』p.2、津波高志『金武町の村落と墓地－伊芸区の場合－』p.10など

a.「琉球国高究帳」「絵図郷村帳」にみる伊芸（17世紀半ば）

17世紀半ばごろの琉球の間切や村の名称は「琉球国高究帳」*や「絵図郷村帳」†といった史料で知ることができる。これらの史料に金武間切に属する「いげ村」という名で記載された村、これが現在の伊芸にあたる村である。また「絵図郷村帳」では、「平田村」という村の記載もあるが、その時にはすでに存在していないという意味で「当時之無」という注記がついている。

平田村は伝承されるいにしえの村である。伝承では、かつて、伊芸の近くに平田という村が存在していたが、どこにあったのか、またその後、伊芸村と合併したのか、廃村となったのか詳しいことは分からない、とされている。一説によると、平田村が廃されたのが1673年の恩納間切創設時のこととされている‡。しかし、その後の研究によると、「絵図郷村帳」に記載された間切名や村名は、正保2～4年（1645～1647年）にかけて薩摩の役人が実地調査に基づいて作成したものとされ、その時期の村名の実情が反映されていると判断でき、また、「当時之無」の「当時」については、この時代の言葉の用い方などから「現在は」という意味であるとされており、したがって、平田村は1645年の時点ですでに存在していなかったことになる§。

ちなみに先述した「琉球国高究帳」には、伊芸の当時の田畑の生産高について、田が118石4斗1升2合8勺1才、畑が6石1升6合5勺と記されている¶。

b.「琉球国由来記」「琉球国旧記」にみる伊芸（18世紀初め頃）

1713年に成立した琉球の総合地誌『琉球国由来記』には伊芸の御嶽について次のように記述している**。

写真1-1 現在のウィヌシマ

写真1-2 現在の平田原

§ 田名真之『南島地名考』pp.67-82
¶「琉球国高究帳」前掲所収 p.146
**「琉球国由来記」[『琉球史料叢書第二巻』所収 p.444]

オシアゲ森　　伊藝村

神名 アカウヅカサノ御イベ

中森　　同村

神名 シマネドミ御イベ

ミアゲ森　　同村

神名 コバヅカ〔サ〕ノ御イベ

右三ヶ所、山留ニ竹木伐故、為_作物_祟祈之時、仙香、花米九合完、麦神酒二器完、同村(百姓中)供_之。伊藝巫ニテ祭祀也。

かつて伊芸には「メーヌウタキ」「クシヌウタキ」「名称不明のウタキ」の３ヵ所の御嶽があったことが伝えられている。これまでに「クシヌウタキ」が「オシアゲ森」に、「名称不明のウタキ」が「ミアゲ森」に、「メーヌウタキ」が「中森」と比定する説がある*が、はっきりとしたことはまだ分かっていない。

この他に「由来記」では、伊藝村の年中祭祀を次のように紹介している†。

伊藝巫火神　　伊藝村

山留ニ竹木伐故、為_作物_、祟祈之時、仙香、花米九合、麦神酒二器(百姓中)

稲穂祭三日巣之時、五水二合、花米九合（伊藝大屋子）仙香、花米九合、麦神酒二器(百姓中)

年浴之時、仙香、花米九合、神酒二器(上同)

ミヤ種子之時、仙香、花米九合、神酒二器(上同)供_之。

伊藝巫、祭祀也。

神アシアゲ　　同村

稲穂祭之時、シロマシ四器、麦神酒二（百姓中）五水二合（伊芸大屋子）

同大祭之時、五水二合（上同）神酒三、赤飯二器（百姓中）

芝指之時、神酒二（上同）供_之。

同巫祭祀也。

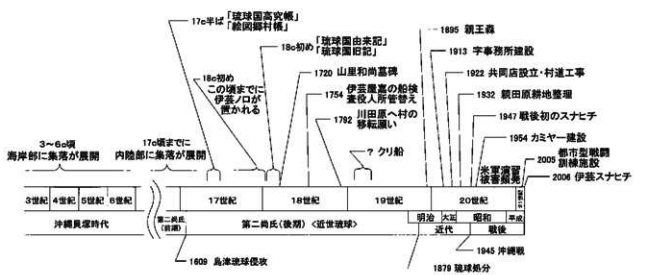


図１－３ 伊芸の略年表

＊ 津波 前掲書 p.17

† 「琉球国由来記」前掲所収 p.447

‡ 田村敏和「伊芸」津波高志他『沖縄国頭の村落《下巻》』p.301

§ 津波高志『金武町の村落と墓地－伊芸区の場合－』p.26 において、同様な認識が示されている。

これらは、作物、主に稲の順調な生育を願った儀礼である。稲作儀礼である稲穂祭（五月ウマチー）、年浴（六月カシチー）などが執り行われていたと記録されている。

これらの記録に見られる「伊藝巫」は伊芸ノロのことを意味している。これまでの研究で「伊芸ノロの歴史は浅いとされている」†という報告があるが、1713年成立の「由来記」にすでに「伊藝巫」が登場することから、少なくともそれ以前から伊芸ノロが存在していたことが見て取れる§。

歴史が浅いとされているのは、戦後まで存命していた伊芸ノロが、四代目のノロであると伝えられていることからであるが、それは次のエピソードとともに伝承されている¶。

「古くは、伊芸・屋嘉の両部落は、金武ノロが祭祀を執り行っていた。ある年、金武ノロは祭祀のため伊芸部落へ向かった。途中のクルガーという川でのことである。大雨で増水していたため、渡ることが困難であった。それでも渡っていくと、ノロは誤って深みに落ちてしまった。しかし、運よく一命をとりとめた。このような事故があったので、以後は伊芸部落にノロを置き、屋嘉部落まで祭祀を行わせることにしたという」。

1731年成立の「琉球国旧記」では、伊芸に流れる川を次のように記載している**。

裏江（此在_伊藝邑東_。末流_于鴨川港_。此属_辰方）

意訳すると「裏江」は、伊芸の東にあり下流の「鴨川港」へと東南東に流れる、というような意味合いだと思われる。この表現からすると、「裏江」は現在でいう美徳川だと判断でき、この下流に「鴨川港」と称する港が存在していたということになる。

c.山里和尚の墓碑銘(1720年)

この「由来記」や「旧記」が成立した時代の人物として、伊芸では山里和尚の伝承が残されている。平田原に山里和尚のものと伝わり、その墓碑銘が次のように刻まれている。

大清 康熙五十九年
権大僧都 法印頼宥 正位
庚子十月二十二日去††

康熙59年は西暦1720年にあたる。この山里和尚について大正8年刊行の『沖縄県国頭郡志』‡‡に次の記述が見られる。

「今を距る百数十年伊芸村に山里和尚といへる善智識ありき。布教の傍村内産業教育其の他諸般の開発に貢献し感化徳望一郷に及び村民の尊信甚だ厚かりしといふ。墓は村の東端にあり後裔山里氏を祭る。十数年前迄御経文書衣類用具等の遺物を保存せしが巫女の託言に惑はされ悉く焼失して今は伝らず」。

頼宥法印に関する史料は、現在のところ『沖縄県国頭郡志』しか確認されておらず、今後の研究に待つところが大きい。

¶ 田村 前掲書 p.301
** 「琉球国旧記」[『琉球史料叢書第三巻』所収 p.235]
†† 墓碑上部に仏様を示す梵字が、その下に仏様のお師元で修行を積んだ仏弟子として頼宥の名が刻まれている。
‡‡ 国頭郡教育会編 『沖縄県国頭郡志』 p.389

d.「近世地方経済史料」にみる伊芸(1754年)

次に伊芸に関する記述を確認できる史料としてあげられるのは『近世地方経済史料』に記載された1754年のもの*である。

一国頭間切奥間、濱、比地、桃原四ヶ村在番構、邊土名、宇良、伊地三ヶ村検者構（中略）金武間切金武井里惣慶、漢那、宜野座、古知屋六ヶ村検者構、伊藝屋嘉二ヶ村美里間切山筆者構、津口出入之船浦懸之船相改候事

これは、港での船荷検査の役人の管轄変更を示す文書で、伊芸村と屋嘉村は美里間切の山筆者の管轄に変更するという意味である。

e.「球陽」にみる伊芸(1792年)

次に、琉球王府の歴史書「球陽」に記載された1792年の伊芸村の記述をみる†。

巻十八 尚穆王四十一年
七月十八日、金武郡内伊芸村を川田原に遷すを准す。
金武郡伊芸村、近く嶽社に沿ひ、更に北に面して家を構ふ。居民常に患病に苦しみ、以て繁庶無し。且遷年に至り、人家多く凋零を致す。因りて思ふに、地理善からざるの致す所ならんと。是を以て地理師神山里之子親雲上に請ひて、遍く地理を相せしむるに云ふ、是れ地理善からず、惟だ民地の内、川田原は、地土磽瘠にして稼穡に利あらず。村籍を構ふるに至れば、則ち坐向、法に合ひ、用水通路、各々其の便を得ん。当今居る所は、地土肥膏にして稼穡に利ありと。遷居を准さんことを祈る。百姓・頭目具呈し、地理師・筵長・検者・両総地頭・田地奉行、印結を加具して、朝廷に稟明す。随即に之れを准す。

これを意訳すると「伊芸村は勢いがなく、病人が多いので、地理師にみてもらったところ、やはり地理がよくないことが原因とわかった。川田原は耕作には適しないが、住居には都合がよく、反対にいまの部落のある土地は耕作地に適するので村を移す方がよいとのことである。住民からの村の移転の申請に、役人や両総地頭などの副申を添えて王府に提出したところ、直ちにこれを推し進めることになった」というような意味になる。

現在、伊芸の集落の中心は屋敷原にあり、川田原では川田川沿いに耕地が広がっている。今後、現在の地名と「球陽」の記事との整合性をとるための研究が必要である。

f.その他史料(近世期)

時期は不明であるが、次の文書も『近世地方経済史料』に掲載された近世の伊芸に関するもの‡である。

クリ舟一艘
伊藝村住居
カナ與那嶺
右所持之御法度に付御取揚被_仰付置_候處、

* 小野武夫編『近世地方経済史料第9巻』pp.195-196
† 球陽研究会編『球陽 読み下し編』pp.418-419
‡ 小野 前掲書 pp.292-293

此段御拂相成候間、望之者致_相談_首尾可」被_申出_候、以上。

山奉行所

金武間切 地頭代

これは、伊藝村の住人がルールに反して所持しているクリ船を没収し、払い下げるので希望者は申し出るように、との山奉行所から金武間切の地頭代への通達である。

(3)近・現代

伊芸には、北白川宮能久親王が休息のために立ち寄ったという伝承があり、その場所が「親王森」という名で呼ばれ伝わっている。北白川宮能久親王は、1895年（明治28）、日清戦争によって日本に割譲された台湾征討に近衛師団長として出征した皇族である。

台湾へは沖縄を経由して入ったとされ、その時、国頭郡各地を巡遊した際に親王森に立ち寄ったと伝えられている。

この他に明治時代の主な出来事は、1890（明治23）嘉芸簡易小学校が設立され、それが金武小学校嘉芸分校を経て1897年（明治30）に嘉芸尋常小学校となり、教育が普及したことが挙げられる。

大正時代には、1913年（大正2）の字事務所を建設、1922年（大正11）の共同売店の立ち上げ、村道の開削工事などの出来事があり、昭和戦前期には1928年（昭和3）、養蚕組合を設立し、稚蚕共同飼育場を設置して副業を盛んにしたことや、1932年（昭和7）に簡易水道を敷設したり、1940年（昭和15）に親田原などの耕地整理を着工するなど、産業や生産基盤の整備が進んだ。

1945年（昭和20）の沖縄戦と、それ以前の海外移住者も含めると伊芸出身者で戦没された方は78人である。終戦後、住民が伊芸へ帰るとほとんどの家が米軍によって取り壊

表1-1 伊芸区の概要

伊芸区	〒904-1202										
位置	北緯26度27分31秒 東経127度54分43秒										
世帯数	383										
人口(人)		計	男	女	土地		面積	%	農業		粗生産額
	総数	929	448	481		合計	644.8	100.0		さとうきび	8,630
	0～9歳	103	46	57		宅地	10.9	1.7		水稲	6,129
	10～19	117	56	61		畑	39.1	6.1		田芋	225
	20～29	104	53	51		田	18.0	2.8			
	30～39	119	63	56		原野	11.8	1.8	(千万)		
	40～49	117	65	52	(ha)	山林	508.5	78.9			
	50～59	118	66	52		その他	56.5	8.8			
	60～69	76	39	37	軍用地		約500ha(区面積の約8割/都市型戦闘訓練施設等)				
	70～79	77	36	41	自然	河川	美徳川/加武川/川田川		製造業	酒造業、他	
	80歳～	98	24	74		山	恩納岳/ザブン岳		文化財	伊芸のがじまる/南ヌ島	
	65歳以上の割合		23.6%		交通	主要道路	国道329号/沖縄自動車道				
						町道整備	延長距離 5.879km				

出典及び注：1) 人口は個引きのあった平成18年8月時点のもの、住民生活課資料　2) 土地は住民生活課資料
3) 農業粗生産額は平成18年度、産業振興課資料　4) 町道整備延長距離は建設課資料

されていた。

戦後初のスナヒチが催されたのは1947年（昭和22）のことで、戦後復興の努力を続ける部落民の融和の目的を果たした。その後、1949年（昭和24）に伊芸農業共同組合を設立、1954年（昭和29）には米軍によって取り壊されていたカミヤーを建設するなど着実に復興への道を歩んできた。

一方、1947年の夏ごろから伊芸の山野部を着弾地として始まった米軍の実弾射撃訓練は、1950年（昭和25）に起こった朝鮮戦争の頃から激しくなり、1956年（昭和31）には部落内に銃弾が多量に落ち幼児が怪我をするなどの被害が出始め、以後、流弾による被害、砲弾の破片による被害などが続く。

このような米軍の演習による被害に加えて、2005年（平成17）には、伊芸の住宅地からわずか数百メートルの場所に新たに都市型戦闘訓練施設が建設され、住民が反対する中、演習が強行された。これに対し地元伊芸区だけでなく、広く県民が参加した緊急抗議県民集会が開かれるなど、米軍の演習に対する伊芸の戦いは現在も続いている。

2006年（平成18）に開催された伊芸スナヒチは、このような米軍の演習による閉塞感を打ち破り、伊芸の人々の融和、団結を深める意義深いものであった。

第2章 伊芸スナヒチ序説

1.目的

スナヒチ（綱引き）は、伊芸区の五穀豊穣と繁栄を願う行事である。また、集落のカリー*につながるともいわれる。16年ぶりの開催となる今回は、区民の団結と融和、また伝統文化の継承を目的としているという。

また、勝敗によって当年の豊凶を占うという。アガリが勝てば豊年、イリが勝てば凶年になるといわれている。

2.期日

今回の綱引きは、2006年（平成18）8月20日（日）に開催された。本来は旧暦6月25日の行事であり、その時期は稲の収穫季節で、その稲藁が綱の原料となった。だが、前回の1990年（平成2）から、休日の方が区民が集まりやすいという理由から、旧暦6月25日以降の土曜か日曜のいずれかに合わせて行われるようになった。

昔は毎年綱引きが行われていたが、今回調査に応じていただいた話者の中で、最高齢の安富祖ミツさん(93歳)によれば、ミツさんが17歳の頃、今から75年前からは、隔年で行われるようになったという。戦時中は長い間中止を余儀なくされていたが、戦後間もない1947（昭和22）年には復活を遂げた。しかしそれ以来、戦後の生活習慣の急激な変化などを理由に途絶えることになった。そして、1990年に43年ぶりに復活し、今回は戦後3回目、前回から16年ぶりの開催となる。

3.アガリ・イリの分け方

綱引きは、アガリ（東組）とイリ（西組）に分かれて行われる。伊芸は5つの班からなり、1・2・3班はアガリ、4・5班はイリとなる。

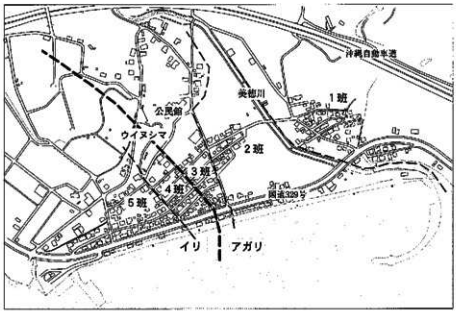


図2-1 アガリ・イリの分け方

＊ めでたいこと。縁起の良いこと。

1班はミトゥクガー（美徳川）の東側、ヒラタバル（平田原）を中心とするあたりに位置する。現在は5班に次いで2番目に人口の多い班となっているが、戦前は数軒しかなく旧1班（現在の2班）に属していた。戦後、人口が増えるにつれ、分家して新たにこの地に屋敷を構える人が増えたため、新たに一班として数えられるようになった。それ以来、旧1～4班は、順に2・3・4・5班となった。

戦前まではイリの人口が多かったので、網引きはほとんどイリが勝利していたというが、戦後、ヒラタバルの人口増加に伴ってアガリが勝つようになった。池原区長によると、現在では、アガリの方が80人ほど多く、網の引き手もアガリが多いという。16年前の網引きでも東西の引き手の割合は、現在とほぼ同じであった。

男性の場合、分家によって、出身の組から居を移した場合は、移転先の組の者となる。女性の場合、アガリの出身でもイリに嫁いだらイリの引き手となることが決まりである。つまり、男女ともに出身ではなく住まいによって、アガリかイリかが決まるという。

昔は、嫁ぎ先から親元の組へ戻り綱を引く女性も少なくなかったという。この場合、テービー（松明）を持った青年たちによって厳しく取り締まられたという。また、分家した男性が、親元の組に戻って加勢することはほとんどなかったようだが、同じ組の中で一人だけ綱を逆方向に引き、親元を加勢するものがいたというエピソードも残されている。

4．綱の雌雄

集落が二手に分かれて作る綱の1つを雄綱（ウーヅナ）、もう1つを雌綱（ミーヅナ）という。沖縄の他の集落では、雌雄の綱を東西のどちらで作るか固定している場合が多い

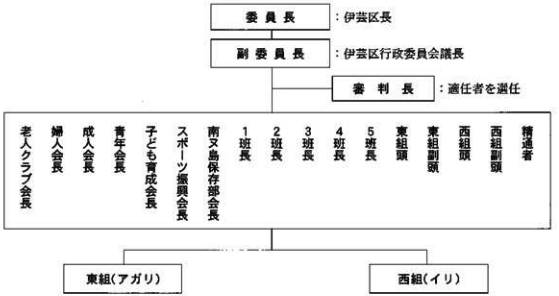


図2－2 伊芸スナヒチ実行委員会組織図

が、伊芸は交代制である。つまり、前回はアガリが雄綱、イリが雌綱であったので、今回はアガリが雌綱、イリが雄綱であった。

5．綱引きの組織

綱引きの中心となる組織が、伊芸スナヒチ実行委員会である。実行委員長は区長である池原政文、副委員長は行政委員会議長である石川栄則が務めた。審判長は綱引きのたびにリーダーシップを発揮できる人物が選任され、前回の綱引きで進行係の経験がある山城和徳が今回その任にあたった。委員は各班の代表者、各種団体の長、綱引きの精通者、アガリとイリの正副組頭によって構成される。実際に、金城久彦（老人クラブ会長）、上江洲敏（婦人会長）、山根弘（成人会長）、上江洲誠（青年会長）、金城浩（子ども育成会長）、新島一人（スポーツ振興会長）、仲間靖志（南ヌ島保存部長）、安富祖玲子（1班長）、上江洲千春（2班長）、安里恵美子（3班長）、宜野座ユキ（4班長）、与那嶺ヨネ子（5班長）、上江洲武久（精通者）、与那嶺一和（精通者）、以上の諸氏がその任に当たった。

実行委員会の下には実際に綱を引く東西の組が置かれる。組には組頭と副組頭及び会計が置かれ、アガリの組頭は上江洲徳幸、副組頭が伊芸武次、イリの組頭は安富祖稔、副組頭は喜瀬均が務めた。また、両組にはそれぞれ、準備段階の係として綱打ち係、トゥールバタ製作係、応援旗の製作係、テービー製作係、ミチジュネーの際の係として、トゥールバタ係、ワカス、囃子係、綱合わせ係、男女のガーイー係、安全係があり、今回、雄綱であったイリにはカマチ棒製作係とカマチバンがこれに加わり、その他に炊事係が組織される。係への人員の配置は両組頭によって決定されたが、積極的に係への参加を希望する区

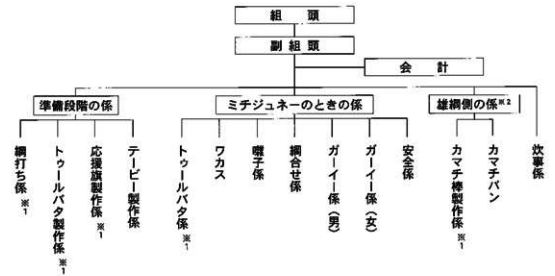


図2-3 アガリ・イリの組織

注 ※1：組織上の正式な名称は特につけられていなかったため、便宜上名称をつけた。
※2：カマチ棒に関する役割は、雄綱側にのみある係で綱引きが行われる度に、綱の雌雄と同様、東西で交替している。

民も少なくなかったという。

綱打ちは全戸を対象として行われ、老若男女問わず、両組それぞれ100人以上が参加したという。主に、年輩の方がクヮーンナ（小綱）を束ねるための綱をない、力を要するクヮーンナ作りは主に壮年の男性たちが担当した。

トゥールバタの製作は、物作りが得意な方と数人の希望者が担当した。ミチジュネーでの持ち手は、トゥールバタが重たいので20～40代の男性が担当し、人数はアガリ・イリともに８人ずつであった。

応援旗の製作には人手と時間を要しないため、綱引きの前日や当日に、数人の希望者や適任者によって製作された。その主な持ち手は女性や子供たちであった。また、テービー製作係はそれぞれの組の有志で担当した。

ワカスを演じるのは、戦前から中学生ぐらいの男子と決まっていた。今回、中学２年生から高校３年生の４人の男子がワカスを演じた。

囃子係は、ミチジュネーやガーエーの際に、大太鼓、パーランクー、ドラガネ、ブラなどの楽器を演奏する係である。両組それぞれに大太鼓２人、ドラガネ２人、カネ２人、ブラ３人が配置された。主に楽器の熟練者や経験者の壮年男性が担当した。

綯合わせ係は、会場において雄綱のカマチを雌綱のカマチに入れる際の調整と安全確認を行う係で、両組の組頭と副組頭が担当した。また、両綱が結合した後、雄綱のカマチにカマチボウを入れて、カマチボウが抜けないようロープで固定するが、これはカマチボウを作ったイリの組頭と副組頭の役割であった。

男性のガーイー係は、テービーを使ったガーイーを行う。火を扱うため危険が伴い、持ち手は細心の注意を払う必要がある。そのため、持ち手は両組からではなく、実行委員から配置された。計16人の男性が持ち手と

写真２－１ アガリ

写真２－２ イリ

なった。

女性のガーイー係は、伊芸スナヒチの代名詞といわれるイナグガーイーを行う係である。両組それぞれ約40人の適任者や希望者が配置され、主に中高年の女性たちが中心となった。

安全係は、ミチジュネーが会場に着くまでの間、歩行者などの安全確認をする係である。組頭が適任者を選び、両組から2人ずつ配置された。

カマチ棒製作係は大工経験者等が、またミチジュネーでカマチ棒を担ぐ人は体格の良い力持ちの男性が担当した。

炊事係は、綱引きの準備に携わる方々に、昼食や夕食、おやつなどを作る係で、班長が呼びかけ、両組それぞれ十数人の婦人方が炊事係となった。

6．伝承

伊芸の綱引きがいつ頃から始まったのかは、他の集落と同じように伝承されていない。しかし、地元では、長い歴史があると言い伝えられている。

コラム１ ―南ヌ島（フェーヌシマ）―

南ヌ島保存会は、伊芸の民俗芸能「南ヌ島（フェーヌシマ）」を復活し、保存、継承するために平成元年に発足された。現在も若者が中心となって、その保存、継承に努めている。

古い形の民俗芸能といわれるフェーヌシマは琉球諸島に広くみられる。だが、伊芸のフェーヌシマは、他地域と比較して、その意味不明なセリフ、棒につけられた鎖、独特な演技、銅鑼のみの打楽器使用など、多くの特徴を持っている。伝承によると、恩納村名嘉真から伊芸に伝わり、その後、うるま市田場にも伝わったといわれる。平成３年には金武町の民俗無形文化財に指定された。

第３章 綱引きの準備

１.綱作り

(１)原料集め

綱の原料となる稲藁はすべて伊芸で収穫したものである。原料の藁は実行委員会が希望者から購入して集めた。２～３週間前から、藁の調達が始まったが、その作業では、両組から人員を動員することはない。調達された藁は、委員会の手によってアガリの分は公民館の車庫に、イリの分は空き家に保管された。両組はその藁を綱引きの10日程前にそれぞれの綱打ち場所へ搬入し、それ以降、両組によって綱打ちが本格化していく。

戦前は、藁は田んぼを持っている家が提供し、田を所有していない家は免除されていたと伝えられている。また藁を集めるのは、若い青年たちの仕事であったようだ。集められた藁は、部落の全世帯へ分配され、各戸ジュッピル*程の縄をなって提出することが義務づけられていたという。各戸での縄作りは綱引きの２～３日前から始まり、出来次第提出したといわれる。この縄作りを通して、部落の全戸が綱引きに参加しているという意識が生まれ、さらには、地域の強い一体感が生まれたという。これは戦前から今日にいたるまで変わることはない。

また原料としては藁の他に、山に自生するかずら†を集め、ホンヅナの強度を高めるために芯として綱の中に入れていたことも語り継がれている。現在では軍用地のせいで山への立ち入りが制限され、十分な量のかずらの採取が困難になったので、綱の中心にはロープを入れるようになっている。しかし、昔からの方法を踏襲するため、現在でも綱のカマチ部分だけには今でもかずらが入れられている。

写真３－１ 伊芸の水田

＊ 十尋。両手を左右に広げたときの距離。一尋は五尺(1.5 m)から六尺(1.8 m)ほどの長さにあたる。
† 「ンーリンカンラ」あるいは「ナナサクカンラ」と称されるかずらと伝えられる。

(2)綱打ち

綱打ちは、アガリは町の指定文化財であるガジマル*の下、イリがさくまつ公園で行われた。アガリの綱打ちは昔から同じ場所だが、イリは戦前まで現在のピッコロ歯科医院の近く、国道329号の真ん中あたりにあった大きなガジマルの下で行われたとされる。そのガジマルは戦争により失われたが、綱引きの時期は真夏であったので、両組とも日差しの柔らかいガジマルの木陰で綱を作っていたことになる。

今回の綱引きでは、両組とも8月12日(土)から綱作りが始まった。その週末は、朝の9時頃から夜10時頃まで、続く平日は、仕事を終えた後、午後6時から9時頃まで綱作りをした。

雄綱と雌綱の綱の作り方は基本的に同じである。異なるのはクーギ†と呼ばれる飾りが雌綱に付けられること、カマチの向きが雄綱が縦、雌綱が横になるということぐらいである。綱作りはまず90mに及ぶホンヅナ(本綱)用のクヮーンナ(小綱)作りから始まる。その作業は14日から始まり、ホンヅナ用をすべて作った後、6mのティーンナ(手綱)用のクヮーンナ作りへと作業が進み、両組ともに綱引き前々日までにはほぼ完成しており、綱引き前日には、午前9頃から午後3時頃まで、綱の細かい部分の調整などを行った。

先述したとおり、雌雄の綱は綱引きのたび

写真3-2 綱打ち(アガリ)

図3-1 綱打ちの場所

* 町指定天然記念物「伊芸のがじまる」。平成3年指定。推定樹齢300年、樹高11m。
† 方言で陰毛のこと。

にアガリとイリで入れ替えられるため、網打ちの作業もそれに応じて行われる。

現在では網打ちを前もって十分な日程を取って始めるが、戦前は1日で完成させたという。作業は網引き当日の朝から徐々に始まり、午後から本格化し夕方までには完成させたといわれ、当時の部落の結束力、連帯力といったものを感じさせる。

戦前の網打ち場での作業は男性の仕事である。各世帯から提出された縄の不足分を補うため、年輩の方は縄を作り、壮年の男性は網打ち作業でクゥーンナを作った。

現在では縄作りの作業に、年輩の女性も加わるようになったり、縄をなう技術の伝承のため、年輩者から若者への指導も網打ち場で行われるようになっている。

写真3-3 網打ち（イリ）

(3)綱の形態と大きさ

網引きの綱は、本体の部分をホンヅナといい、引き手が握るための部分をティーンナという。ホンヅナの先端にある結合用の輪の部分は、特にカマチあるいはカマチグチと呼ばれる。

カマチを含めたホンヅナは、クゥーンナと呼ばれる90mの綱を5本束ねたものを半分に折り返し、縄で結束することで作られており、直径はおよそ30cm、全長がおよそ45mになる。したがって雌雄の綱を結合させると90mの綱が出来上がる。綱の強度を高めるために、カマチの芯にはかずらが、それ以

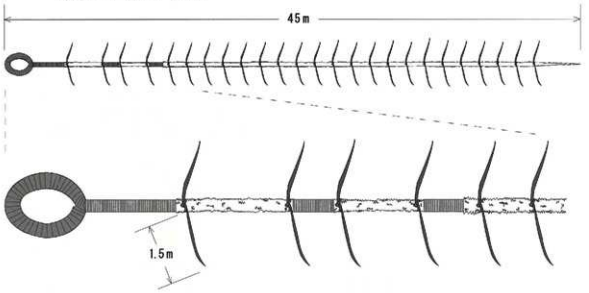


図3-2 綱

外の部分にはロープが入れられている。

ティーンナも、やはりクヮーンナと呼ばれる綱でできている。6mの長さの1本のクヮーンナの真ん中をホンヅナに結びつけ、引き手が握るための部分を1.5mずつ左右に出す。これがホンヅナに25本ついているため片側25本、両側で50本のティーンナがあることになる。

カマチの大きさは、戦前は現在のものより小さかったと伝えられている。今回は、イリで作った雄綱が先に出来上がり、その大きさはカマチの外側、短い方の直径でおよそ1mとなった。アガリでは、雌綱のカマチの大きさを、雄綱のカマチに合わせて作り上げた。

瑞慶村智廣さん（90歳）の話によると、伊芸は大きな部落ではなかったので、他の部落に比べると綱もそれほど大きくなかったが、それでも今回の綱より、カマチの部分を除き、長さも直径も大きかったようだ。

2.道具の準備

(1)カマチボウ

カマチボウとは雄綱と雌綱をつなぐための丸太である。綱引きの際、雄綱のカマチを雌綱のカマチに通した後、雄綱のカマチにカマチボウを通すことによってはじめて綱引きができる。今回のカマチボウの大きさは、長さ約2m、直径約15cmで、昔ながらの松の木が使われた。

カマチボウを作製するのは雄綱を作る組の役割である。今回はイリが雄綱を作るので、カマチボウを作ったのはイリであったが、雌雄の綱を作る組は毎回交代するので、カマチボウを作る組も同じように毎回変わる。

今回、綱引きの約1ヵ月半前に、部落の北側にあるウヤマ*から予備のものを合わせて2本の松の木を伐採してきたという。カマチボウの作製はイリの本村成男さんが担当した。本村さんは大工の経験があるという。作

図3-3 カマチボウ

写真3-4 カマチバン

＊ 山を丁寧にウヤマイ（敬い）言葉で表現したもの。

業はまず、木の皮をはがすことから始まった。その後、ミトゥクガー（美徳川）にかかる橋の付近で、カマチボウを川の水に数日間浸けたという。しかし、台風接近で川が増水し、流される恐れがあったことから、公民館近くの田に移された。その後、田からあげて、皮をはいだ状態で天日にさらし、綱引きの6日前から形の調整やニスを塗るという作業が始まったという。

戦前は、木の伐採から作製までの作業は、綱引きの当日、雄綱側の組の青年たちによって行われたといわれる。大きさは今回と同じぐらいだったというが、川や田に浸けたり、ニスを塗ることはなく、皮を剥いだだけのものであったという。

伊芸では戦前から、ミチジュネーのときのカマチボウの持ち手のことをカマチパンといい、体格の良い力持ちの男性が選ばれたという。今回もこれが基準となった。これには2つの理由があるという。1つ目の理由は、重たいカマチボウを担がなければいけないからである。今回、山里幸男さんがカマチパンに選ばれ、補助員と2人でカマチボウを担いだ。もう1つの理由は、カマチボウをカマチに入れるときに危険を伴ったからである。現在はカマチボウを入れた後、綱に縛って固定するが、かつてはそうではなかった。カマチボウが入った瞬間に綱引きが始まったのである。カマチには両組の引き手の大きな力がかかるので、手が挟まり怪我をする危険性があった。

(2)旗

伊芸の綱引きには3種類の旗が登場する。ハタガシラ（旗頭）、トゥールバタ（灯籠旗）、応援旗である。

a.ハタガシラ

沖縄の他地域において、ハタガシラとは一般的には、2つに分かれた組を象徴するそれぞれの旗のことである。しかし、伊芸では両組の旗はトゥールバタといい、ハタガシラとは呼ばず、部落を象徴する旗をハタガシラという。

ハタガシラは現在、公民館倉庫に保管されているが、戦前はカミヤー（ヌールヤー）に保管されており、旗の部分は箱の中に、カシラ（頭）の部分は棚の中に収められていたといわれる。ハタガシラがカミヤーから出されるのは、綱引きとムラアシビ（村遊び）の年に2回である。ムラアシビはムラシバイ（村芝居）ともいわれ、かつては、旧公民館で旧8月11・13・15日の3日間行われていたという。ハタガシラは、綱引きとムラアシビ以外にはカミヤーから出してはいけないと伝えられている。しかし、例外もあったようである（p.21 コラム2参照）。

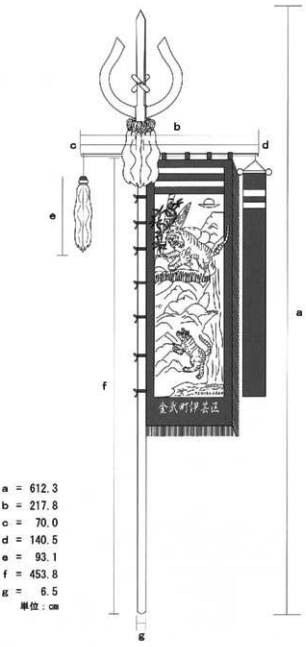
戦時中、カミヤーは米軍によって取り壊され、ハタガシラもその大部分が失われてしまったという。幸い、カシラの部分だけは残っていたが、長い間、ハタガシラとして日の目を見ることはなかった。そのハタガシラが今回の綱引きに合わせて、60年ぶりに復

元された。区長を中心とした区の職員らが、旗の新調やカシラの修復に1ヵ月を要したという。また、旗の図案は、数年前、池原敏勝さん（故）が、古老からの聞き取り調査に基づいて作成していたという。

ハタガシラの大きさは全長約6mで、カシラの部分は穂先が3つに分かれた槍の形をしている。戦前のものは、3本の穂先のうち外側の2本は、現在よりするどい形であったとされる。

旗の図柄は、崖の上の母虎が崖下の子虎が這い上がろうとしているのを見下ろしているものである*。その背景には半月が描かれているとされる。満月はそれ以上、満ちることはないが、半月はこれから満ちていくので縁起が良いという意味があるという。また、横竿の先には細長いのぼり旗がついているが、昔はこの部分にムカデを模したのぼり旗がついていたという。

綱引き当日の午後1時からは、復活したハタガシラのお披露目を目的としたミチジュネーが始まった。順路は、公民館向かいのカ



a = 612.3
b = 217.8
c = 70.0
d = 140.5
e = 93.1
f = 453.8
g = 6.5
単位：cm

図3-4 ハタガシラ

写真3-5 ハタガシラのミチジュネー

＊「獅子の子落とし」ということわざに由来するものと思われる。

ミヤーを出発し、アガリの綱打ち場、イリの綱打ち場を回って、公民館に戻りグラウンドに入った。そして、綱引きのために用意された舞台の横にハタガシラを固定した。

持ち手は実行委員に属する青年男性、上江州誠、仲里雄也、安富祖匠、新島一人、仲間靖志、仲間昌樹、仲里大地、山城國雄、仲間義守の9人であった。ハタガシラは一人で支え持つものである。長い時間持ち上げるのは重くて大変なので、持ち手の体力などの頃合いをみて他の者と交代する。交代要員は、ハタガシラを持っていないときは、4本のロープと4本の支え棒でバランスをとる補助にまわった。かつては、支え棒はなく、補助はロープだけで行われ、持ち手の人員は5～6人だけだったという。カミヤーの前、両組の綱打ち場、グラウンドでは、部落の威勢の良さを示す意味を込め、重たいハタガシラを力強く上下させる所作が行われた。

このミチジュネーはハタガシラの60年ぶりの復活を祝ったもので、本来綱引きの恒例行事ではない。元々、綱引きの際には、ハタガシラはカミアシャギ†の近くのフクギに結びつけるだけであったという。

ハタガシラの由来について、次のような伝承がある。瑞慶村智廣さん（90歳）によると、明治の中頃から終わり頃、智廣さんの曾祖父である智彦氏がハタガシラを寄贈したとのことである。智彦氏は与那原の出身で伊芸には薪を買うために、マーランセン‡で与那原と伊芸とを行き来していた。天候の悪いときや台風のときには、風雨がおさまるまで宿を借りたり、舟を岸に上げるのを伊芸の人たちに手伝ってもらったお礼として寄贈したという。ハタガシラは手作りではなく那覇で購入したもので、マーランセンに乗せて伊芸に運んできたという。

コラム2 ―カミヤーを出たハタガシラ―

「屋嘉の村芝居を金武の牛庭で公演」

1909年（明治42）間切が村に改められて以来の、初代村長から現村長に至る10代の歴代村長が、1936年（昭和11）皆健在でおられることは県下でも稀なことであり、しかも村政の顧問役として活躍されていることは、村の大きな誇りであるとして、当時の村長池原新蔵が各字の区長に呼びかけ、激励会と長寿祝賀会を村を挙げて催すことを決めた。

当日の余興は村内の村芝居を出したらどうかということになり、古知屋、宜野座、屋嘉の3字が候補にあがり、屋嘉に決まった。

祝賀会場は並里のウシナー（牛庭）で屋嘉から金武までの道ジュネーは旗頭を先頭に出発した。旗頭は部落の象徴としての威厳があり、他部落を通過するときには前日に許可を受けるのが慣例となっていた。

伊芸部落入口で伊芸の旗頭に迎えられ、伊芸の旗頭を先頭に部落を通過し、平田原で屋嘉の旗頭を送ったという。金武でも馬場入口で同じように迎えられ、並里では記念通り雄飛の森前で迎えられて、産気揚揚と無事に牛庭に到着した。（『屋嘉区誌（戦前編）』 pp.108-109）

† 町指定文化財「伊芸のがじまる」のある旧公民館敷地にあったとされる。
‡ 18世紀末に沖縄全域に普及した、中国式ジャンク型の船。「馬艦船」。

b.トゥールバタ(灯籠旗)

トゥールバタとは両組を象徴する旗であり、アガリ・イリそれぞれ1本ずつ持っている。

トゥールとは旗の最上部につけられている灯籠のことである。昔は、その中に火をともしたロウソクが入っていたそうだが、今回、アガリのものにはロウソクの代わりに電球が入っており、イリのトゥールには何も入っていなかった。

かつては、トゥールバタは保管することなく、毎回新調した。両組で工夫をこらしたデザインのトゥールバタを作ったという。今回、高さは7m以内と決められたが、その他の装飾は両組に一任された。

旗には、アガリは「繁栄」、イリは「五穀豊穣」と書かれている。この文字は両組に固定されているものではなく綱の雌雄と同様に毎回交代される。前回はアガリが「五穀豊穣」であった。また「繁栄」「五穀豊穣」という文字は戦前からあったが、前回の綱引きでは「繁栄」ではなく「瑞雲」の文字が使われたという。

今回、アガリはトゥールバタを新しく作った。伊芸貞男氏が中心となって、上江洲武久氏などによって、公民館横の倉庫において約10日を要して完成させた。旗には「繁栄」、トゥールには「東」という文字がある。昔は、トゥールに本物の稲穂を貼り付けたというが、今回は稲穂を模した飾りがトゥールを囲むように取り付けられている。また、その下には矢を模した飾りもつけられた。綱引き

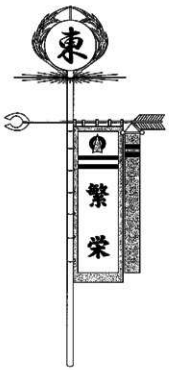


図3-5 アガリのトゥールバタ

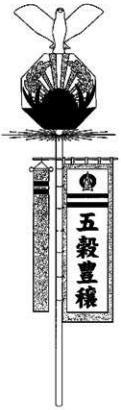


図3-6 イリのトゥールバタ

２日前の午後７時頃、アガリのトゥールバタは公民館横の倉庫から綱打ち場へトラックで運ばれた。ブラ、太鼓、ドラガネの鳴り物の響く中、ゆっくりと移動していった。

イリのトゥールは、前回の綱引きで使用した朝日のデザインのトゥールを、色だけ塗り直して使った。今回は、金武や並里の鳥の飾りがついたトゥールバタを参考にして、トゥールの上に平和の象徴である鳩の飾りを作ってのせたという。製作は、津嘉山朝正氏が中心となって、伊芸勇光氏、仲里全孝氏、当山光次氏、登川克則氏らが参加して、約１週間前から製作を始めたという。当山氏の車庫が作業場となり、旗のデザインは登川氏が担当した。戦前のトゥールは、梅の花の形をしており、アガリと同様に外側に本物の稲穂を貼り付けたもので、手先が器用なお年寄りの方々が作ったという。

前回は、灯籠の上には蝶々をかたどった飾りがつけられていたという。それはトゥールガーイーの時にハタガシラを上下させると、羽ばたいているように見えたという。戦前最後の綱引きには、灯籠の上に戦闘機の模型が乗せられたという。

イリのトゥールバタも、綱引き前日、鳴り物を鳴らしながら綱打ち場まで運ばれた。

ｃ.応援旗

応援旗は綱引きに登場する旗のうち、最も小さいものである。このような旗は、戦前は使われていなかったという。

今回、実行委員会からアガリとイリの応援旗が１５本ずつ用意された。応援旗はアガリが黄色の、イリは緑色の縁取りがある。旗竿はチンブクという細長い竹を使う。その竹

写真３－６ アガリのトゥールバタ

写真３－７ イリのトゥールバタ

は、かつては、カマチボウ同様ウヤマで採取した。今回は、各組から2人ずつ動員して、実行委員会の役員と一緒に大宜味村の山から採集した。

その旗にアガリは「細心大胆」「四海兄弟」「不撓不屈」「東」など、またイリは「平和」「繁栄」「西」などの文字を、イリは年配の方々が綱引き前日に、アガリは平良幸夫氏で綱引き当日に書き入れた。

さらに、実行委員会が準備した旗とは別に、アガリでは「なごみ」「ゆめ」「にじ」「和」「山川海」「闘魂」「祈民栄」「太陽」と書いた旗を20本ほど作製した。

両組とも応援旗の主な持ち手は女性や子供であった。

(3)鳴り物

今回、大太鼓、パーランクー、ドラガネ、ブラなどの楽器が使用された。ミチジュネーやガーイーなどの時に雰囲気を盛り上げるために演奏する。戦前はドラガネ、太鼓、ブラの3種類しかなかったという。

a.太鼓

太鼓には、大太鼓とパーランクーの2種類が使用された。

大太鼓はスズミともいい、持ち手は男性である。普段は青年会が管理しており、両組が2つずつ使用した。戦前、大太鼓は伊芸に1つしかなかったので、雌綱を担当する組が大太鼓を使ったという。

パーランクーは、女性や子供によって打ち鳴らされる。今回の綱引きでは、区が管理しているものと、屋嘉から借用したものを、両組でそれぞれ約25個ずつ使った。パーランクーは戦後から使われるようになったもので、戦前は無かったといわれ、イナグガーイーには、パーランクーではなく締太鼓が使われたという。

写真3-8 パーランクー

写真3-9 ドラガネ

b．カネ

金属製の打楽器で、大小２種類ある。大きいものはドラガネ*、小さいものはカネ†といわれる。また、両方とも単にカネとも呼ばれる。両方とも公民館が管理しており、両組でそれぞれ２つずつ使用した。

戦前は、大太鼓と同様ドラガネが１つしかなく、こちらは雄綱の組が使ったとされる。小さい方のカネは戦前、伊芸には無かったといわれ、戦後から綱引きで使われるようになったとされる。

c．ブラ(法螺貝)

ブラとは吹き鳴らす楽器の法螺貝のことである。戦前から使われており、組に１つずつあったという。当時は、個人が所有しているものを使っていたようだが、現在は区が管理しているものを両組が３つずつ使用した。

吹くときはある程度の肺活量が必要で、また熟練を要する楽器でもあるため、青年男性のカッティ‡が主な吹き手となった。戦前、ブラの吹き手は、先導役としてスネーの先頭に立つこともあったという。他にもブラは、青年会の集合や火災などの非常時などの合図にも使われたという。

(4)テーピー(松明)

テーピーとは枯れた竹を束ねてつくった松明のことである。

材料となる竹の調達からテーピー作りまで、前回の綱引きでは実行委員会が役割を担ったが、今回は両組に一任され、それぞれの組の有志が集落北側の山から竹を調達し、それを直径約15ｃｍ、長さ約２ｍに束ねて両組とも10本ずつ作った。

テーピーは本来、主として照明に用いるものであった。綱引きは今回、昼間であったが、戦前は夜間に行われており、照明が必要となるためテーピーの持ち手が配置されたのである。当時は、ほとんどの民家は茅葺で

写真３-１０ カネ

写真３-１１ ブラ

＊ ドラ（銅鑼）のこと。金属製の円盤型打楽器。ひもでつるし、ばちで打ち鳴らす。
† 金属製の皿型の打楽器で、本土の郷土芸能の囃子に用いる摺鉦（すりがね）と同様のもの。
‡ 方言で熟練している人のこと。

あったため、テービーの火には細心の注意を払った。火が燃え移らないよう、近くの家の屋根には事前に水をかけたという。

また、テービーは引き手の監視用としても使われた。綱引きの最中、相手陣営に味方の組の者が加勢していないかを見張った。小さな部落なので、顔を知らない者はいないため、ルール違反者はテービーの灯りでも十分に顔を見分けることができたという。

そしてもう1つ、ルールを破って綱を引く者への制裁にも使われた。違反者がいれば、テービーをその人の頭上に持っていき、持ち手をポンとはたいて火の粉を振り落としたという。

今回の綱引きでは、テービーは照明や監視あるいは制裁のためではなく、ガーイーをデモンストレーション的に行うために準備された。

写真3-12 テービー

(5)衣裳

a.ワカスの衣裳

戦前の綱引きでは、ほとんどの人が普段着で参加する中、ワカスの身につける衣裳が人々の目をひきつけていたとされる。ワカスが扮しているのは組踊「姉妹敵討」*の登場人物である。アガリのワカスは武芸の修行を積み、見事仇を討つ亀松・乙鶴姉妹の役を演じている。イリは敵役の謝名大主とそのお供である。

姉妹役のワカスは2人とも、赤い胴衣と白い下裳に黄色地紅型衣裳を前つぼりにし、頭には牡丹の前花にバサラを飾り紫長巾を締め、足元は白足袋、長刀を手にしている。謝名大主は、薄銀衣裳に広帯を貝の口に前で締め、陣羽織をはおり、足は白足袋、頭は入道頭巾で向こうに龍角を飾る。手には太陽と月の紋の大団扇、左腰に太刀を差す。お供は紋無黒衣裳を東からげに着て、薄茶色広帯を締める。頭には白請鉢巻、足元は白黒縦縞脚絆に白足袋、やはり左腰に太刀を差す。4人とも顔から首にかけて白塗にし、謝名大主は付け髭をつけ、残りの3人はかつらをかぶった。

戦前から、ワカスは今回のような衣裳と化粧であったとされるが、戦前の衣裳は戦争で失われてしまった。ワカスの衣裳は現在、公民館に保管されているが、かつてはカミヤーで行李†に収められ保管されていたという。現在の衣裳は16年前の綱引きのときに新調されたものである。今回も、そのときのもの

* 作者・創作年代未詳の組踊。姉妹が父のあだ討ちを果たす話で、問答・武芸の修行・立会いなど動的な場面が多い。
† こうり。竹または柳などで編み、衣類や旅行用の荷物などを入れるのに用いるかぶせ蓋つきの入れもの。

を使用したが、それは衣裳の色や模様、手にする小道具など、戦前とほぼ同じように再現されたものだという。

かつては、６人のワカスがいたとされ、役柄に応じてそれぞれの衣裳があったので６人分の衣裳があったことになる。現在のワカスは４人で、衣裳も４人分である。

着付けと化粧は、吉田琉球舞踊研究所の先生方によって、綱引き当日の午後、両組とも公民館で行われた。かつては、旧公民館において婦人会が担当したという。

ｂ.その他の衣裳

前回の綱引きからワカスの衣裳の他にも次の衣裳が用いられた。

まず、黒装束は、正副委員長、審判長、正副組頭、両組のトゥールバタの持ち手が着けた。その他の委員会の役員は、黒い生地で襟や脇などが赤く縁取られたウッチャキ‡をつけた。南ヌ島保存会のメンバーは、南ヌ島を演じるときに用いる黄土色の生地で黒い縁取りのウッチャキを身につけていた。

これらの方々は頭にサージ§を巻き、腰には帯を締めている。委員長や審判長など実行委員会の役員は紫色であり、アガリは黄色イリは緑色と、両組に属する人はそれぞれのシンボルカラーのサージを巻いている。

ガーイー係の女性たちがつけていたウッチャキは婦人会の手作りで、柄は様々である。これらの衣裳はすべて公民館で管理しているという。

この他に、シンボルカラーで色分けされた手ぬぐいがそれぞれの組で配られた。手ぬぐいには、「祝 伊芸スナヒチ 平成18年8月20日 主催伊芸スナヒチ実行委員会」とプリントされ、参加者が鉢巻きにして用いた。

写真３－１３ ワカス（姉妹）の衣裳

写真３－１４ ワカス（謝名大主）の衣裳

‡ 主にエイサーなどの衣裳として使用される上着。ティーウッチャキ（肩）にかけるように着用する。
§ 手ぬぐいのこと。

3.綱引き歌の練習

伊芸スナヒチの代名詞といわれるイナグガーイーの歌の練習が、本番に先立ってなされた。

練習はアガリとイリに分かれて行われ、両組ともに中高年の女性が中心であったという。

アガリは綱引きの前日に、ガーイー歌のプリントを用いて綱打ち場のガジマルの下で行われ、イリはガーイー歌に詳しい本村シゲさんによる録音テープを参考にして、およそ1ヵ月前から練習したという。

第４章 綱引き当日

１.綱引きの場所

前回から綱引きの会場は、伊芸区民グラウンドとなった。かつては、ＪＡおきなわ伊芸支所近くの十字路を中心として引いたという。その十字路の南北に伸びる道はアガリとイリの境界でもある。

会場が変更になったのは道幅が狭く、そこに大人数が集まると怪我をする恐れがあること、また、テービーの火が民家に燃え移る危険性があること、さらに、旗頭やトゥールバタの移動中に電線に引っかかることが多いなど、安全面の理由からという。

２.ミチジュネー（綱引き行列）

(1)ミチジュネー

アガリとイリはそれぞれ人員総出で、綱打ち場から綱引きの会場まで綱を担いで移動する。綱だけではなく、トゥールバタや囃子、その他大勢の人々が列を成してゆっくりと進むことから、芸能や祭りでの練り行列と同じようにミチジュネーあるいは単にスネーと呼ばれる。

(2)ミチジュネーの順路

戦前は、両組がお互い同時に出発し、「ヨッサイ、ヨッサイ」の掛け声と囃子係のにぎやかな囃子とともにミチジュネーが進んだという。道順は、アガリの場合、綱打ち場であるカミアシャギを出て当時の綱引き場所であったＪＡおきなわ伊芸出張所の十字路へとまっすぐ進むルート、イリは当時の綱打ち場であるピッコロ歯科辺りから部落内へ入り、しばらくさくまつ公園へ向けて進んだ後、右へ折れて綱引き場所へ進むルートで

図４－１ 綱引きの場所とミチジュネーのルート

あったという。

現在の会場となってから、グラウンドの入り口が一つであるため、出発は同時だが、雄綱が先に会場入りするよう、雌綱の側がミチジュネーの途中で雄綱を通り過ぎるのを待機するようになった。今回の綱引きでも、実行委員会から数人の進行係が出向いて誘導や待機などの指示を出していた。

(3)ミチジュネーの順序

ミチジュネーでの順番については、イリには「先頭からカマチボウ、トゥール、楽器、綱の順で」と、また、アガリにも同様な指導

写真4-1 ミチジュネー（アガリ）

写真4-2 ミチジュネー（イリ）

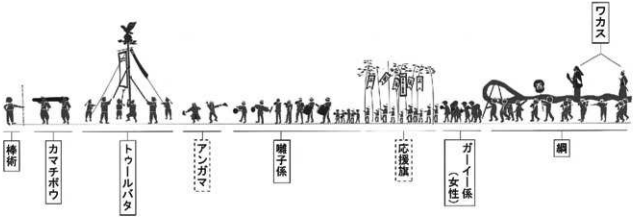


図4-2 ミチジュネーの順序
注：カマチボウのあるイリを参考にしたイメージ図

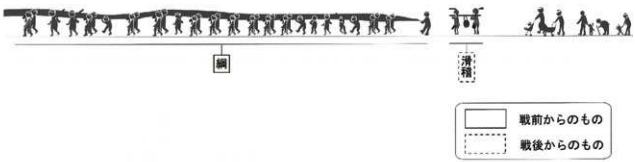
が実行委員会からあったという。囃子係や、パーランクーをもったイナグガーイーの女性、また、それ以外に特別な趣向をこらした者の参加については両組に任せた。実際、今回のミチジュネーでは、トゥールバタ、囃子係、応援旗、イナグガーイーの女性、ホンヅナと続いていた。雄綱を受け持つイリにだけは、トゥールバタの前にカマチボウが列に加わった。

また、戦前は棒術の演武が露払いとして先頭に立ったとされ、今回、イリはこの所伝に基づいてその役目を山城和夫氏に務めてもらったとのことである。会場に向かうまでの間、要所々々で六尺棒の短い演武を行うというものである。ミチジュネーの先頭で邪気を払い、道を開けるという意味がある。戦前は両組の先頭にみられたという。

この他、顔を白塗りにし、面白い格好で酒甕を持つ男性がいた。その風体から、「滑稽」とも呼ばれており、両組に２人ずついた。甕には酒が入っており、綱引きの参加者に振る舞われた。

これに加え、イリには八重山諸島の盆行事にみられるアンガマと呼ばれる仮面をかぶった男女２人がいて、愉快なしぐさで、みんなの笑いを誘っていた。事前の練習はなく、本人たちの希望により即興でやってもらったという。滑稽もアンガマも、戦前はなかったといわれる。

写真４－３ 囃子係（アガリ）



(4)綱のスネー

綱は、現在は、長さ2m余りの棒をおよそ1m間隔で25本、綱の下にくぐらせ、その棒を2人または4人がかりで肩に担ぎ上げて運ぶ。肩に担ぐ棒は、両組がそれぞれ、ウヤマから採取してきたものである。カマチグチは直接肩に担いだり、長い棒で下から支えあげるようにして運ぶ。重たいカマチグチは主に、青年または壮年男性を配置し、軽い後尾の方には女性が配置された。両組頭によると、ミチジュネーで綱を担いでいる人の人数はそれぞれおよそ80人という。

戦前は、綱を運ぶときに棒を使うことはなく、直接肩に乗せて担いだといい、ミチジュネーの参加者は現在より多かったという。

(5)トゥールバタのスネー

トゥールバタは、アガリ・イリそれぞれの組を象徴する旗である。

持ち手は、今回は両組それぞれ8人の青年男性であったが、戦前は5～6人であったという。また、トゥールバタのバランスをとるために4～5本の棒が使われたが、これは戦前はなかったといわれる。トゥールバタの持ち手は両組とも8人ずつ、いずれも20～40代の男性で構成されていた。ミチジュネーや綱引きの直前にはこのトゥールバタを力強く上下に動かすガーイーが行われる。

(6)囃子

ドラガネや太鼓の音が鳴り響くと気持ちが高揚し、綱引きの雰囲気が一気に盛り上がり、囃子のリズムに合わせて「サーサーサーサー」の掛け声が沸きあがる。

今回の綱引きでは、ハタガシラのお披露目のミチジュネーも含めて、代表的な4種類の囃子のリズムを確認することができた。

譜例1はハタガシラのミチジュネーの直前、カミヤーの前で演奏されたものである。ドラガネと大太鼓だけで演奏され、何かが始

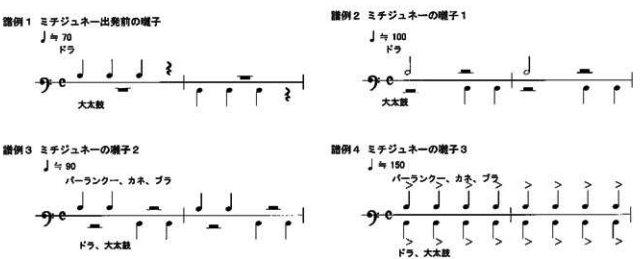


図4-3 囃子のリズム

まることを予感させるようなゆったりとしたリズムが特徴である。同じくハタガシラのミチジュネーで演奏されたのは譜例２で、これも比較的ゆっくりとしたリズムで「ハーイーヤー」とかけ声が入る。ハタガシラのミチジュネーでは重みや威厳といったものが感じられる囃子が終始演奏された。

綱引きのミチジュネーの出発直前に演奏されるのは譜例４である。全ての楽器とかけ声が一斉に大きな音で鳴り響く、力強いリズムの繰り返しである。するどい指笛が合いの手に入る。全ての人が笑みを浮かべ、とても楽しそうにこのリズムに身をゆだねており、高揚した気分が見ているものにも伝わってくる。

ミチジュネーの実際の行進で演奏されるのは譜例２と譜例３である。主に演奏されるのは譜例２で、「ハーイヤ」というかけ声で、重たい綱を力を合わせて持ち上げながら進むのに適した囃子である。ガーイーの際には、また譜例４が演奏され、一層綱引きの雰囲気が盛り上がりを見せる。

(7)ワカスのスネー

a.ワカス

ミチジュネーの最中、綱の上には組踊の登場人物に扮した少年たちが足を踏ん張って立っている。彼らはミチジュネーで最も華やかで見栄えがする役回りを担っている。その役目は、金武・並里ではサールと呼ばれ、他の地域ではシタクと呼ばれることもあるようだが、伊芸ではワカスと呼ばれている。

ワカスは綱の雌雄と同じく交代制であり、演じる役は組に固定してはいない。今回はアガリが組踊「姉妹敵討」の亀松・乙鶴姉妹、イリが謝名大主とそのお供であった。

現在は、ワカスは各組２人ずつで演じられているが、戦前は３人ずつであったとされる。

また、現在はミチジュネーの最初から会場でのワカス合戦を終えるまで、ワカスは綱の

写真４－４ ワカス（アガリ）

上に立っているが、戦前は綱引き会場で綱へ乗ったという。現在の綱は、戦前のものより小さくなっているため、ワカスは綱の上でバランスを保つのに以前にも増して苦労しているようだ。戦前から、綱の上のワカスが体勢を崩し綱から落ちると、勝負に負けると考えられていた。そのため、かつてはワカスの足を掴まえて支えたとされるが、足を固定されると逆にバランスが取りにくいとのことから現在では行われていない。その代わり、現在ではバランスを取るための棒を手に持っている。

b．ワカスの演者

今回のワカスは、アガリでは姉・亀松を小波津昇矢（高校３年生）が、妹・乙鶴を伊芸武士（中学２年生）が、イリでは謝名大主を仲里孝也（中学３年生）が、お供は池原諒（中学３年生）が務めた。

戦前から、ワカスは中学生ぐらいの男子が演じるものと決まっていたという。高校や大学に合格した男子をのせたという話もあったようだ。戦時中には、出征する人たちがワカスを演じたこともあるという。

女性はカリシラーといって絶対に乗せなかったという。カリシラーには縁起が悪い、または不吉という意味がある。漁師が自宅から海に向かう途中に女性に会うこと、また、元旦の朝、家へ訪ねてくる最初のお客が女性であることなども、縁起が悪いこととされ、カリシラーといわれたという。

写真４－５ ワカス（イリ）

３.綱引きの直前

(１)綱引き直前の流れ

ミチジュネーを終え、綱が綱引き会場へ入ると、カマチを結合させる場所の手前で両組とも一旦綱を降ろし、その後トゥール合戦が始まる。トゥール合戦を終えるとトゥールバタは所定の場所へと固定される。その後イナグガーイーで会場が沸きあがり、テービー合戦まで盛り上がりが持続する。アガリ・イリともに綱引き勝負へ向けて興奮が高まっていく中、実行委員会からワカス合戦の開始の指示が出て、一旦落ち着きを取り戻す。その後、再び担ぎ上げられた綱の上で、堂々としたワカス合戦が繰り広げられる。その間、互いに間合いを詰める綱寄せが行われる。ワカスを綱から降ろした後は、さらに綱が寄せられカマチ同士を結合する綱合わせが行われ、カマチボウが入れられる。もう一度綱を降ろし、ドラガネと指笛が響く中、カマチボウが綱に縛られて固定される。アガリとイリの綱の位置を微調整し、準備が整った後、審判長から実行委員長へ準備完了の報告がなされ、スナヒチスーブ（綱引き勝負）が始まる。

(２)示威行為

綱引きの直前には、敵方に威勢を見せつけるための行為が行われるが、これを伊芸ではガーイーまたはガーエーと呼ぶ。ガーイーには、トゥールバタを使ったトゥール合戦、女性同士でもみ合うイナグガーイー、テービーを使ったテービー合戦、ワカスが威容を張り合うワカス合戦、それに綱合せがある。単にガーイーという場合は、イナグガーイーと、テービー合戦の別称であるイキガガーイーの

写真４－６ トゥール合戦（アガリ）

写真４－７ トゥール合戦（イリ）

2つを指すことが多い。また、綱引きを終えた直後、興奮冷めやらぬうちにもガーイーが行われる。

a.トゥール合戦

トゥール合戦は、綱引きの会場で行われる、トゥールバタを使ったガーイーである。トゥールバタを上下させて、意気盛んなところを見せるのである。

左の手のひらで旗竿の底を腰の高さで、右手で顔の高さで支え、膝を使って腰を落としたり上げたりして、かなりの重みがあるトゥールバタを上下させる。一人ではバランスをとるのが難しいため、旗竿の高い位置に縛り付けたロープや、先が二股になった支え棒で補助が行われる。それでも動きが激しくバランスを崩しそうになる場合、旗竿の持ち手が2人になる場合もある。

このように、トゥールバタの持ち手にとっては大仕事であるが、見ている者にとっては躍動感あふれる動きに雄大さを、トゥールバタの飾りのしなやかな動きに優美さを感ずることができる。

このトゥール合戦がスナヒチスーブの前後1回ずつ、計2回おこなわれた。

b.イナグガーイー

元々、イナグガーイーは伊芸の綱引きの代名詞といえるほど有名で、これを目当てによその地域から多くの見学者が訪れたという。

戦前の綱引きでは、イナグガーイーはタイコウチャー（太鼓を打つ人）、ウタサー（歌う人）、モーヤー（踊る人）の3つの役割があったとされるが、現在でははっきりとした区別はないという。戦前から両組ともに20～30人の規模で行われており、現在でもそれは同じである。今回、中心となっていたのは中高年の女性たちであるが、かつては25歳前後の若い女性たちが活躍していたとされる。

写真4-8 イナグガーイー

戦前のイナグガーイーはとても激しく、男たちのガーイーにも負けないほどの勢いがあったという。太鼓や手拍子を打ちながら、あるいは手にした応援旗を上下に振りながら、アガリの女性は「イリビラ」、イリの女性は「アガリビラ」と声を張り上げ、互いに近寄っていく。両者の間合いが、手が触れそうなほどに詰まると、「マキユミ、マキユミ(負けるものか)」、とリズムに合わせて両手を上げ、手のひらを互いに弾き合い、相手を押し返すような仕草を繰り返す。太鼓を手にしている者も、同じような仕草をしており、一見すると両者が揉み合っているように見える。この光景は今回の綱引きでも変わらずに続いている。

イナグガーイーでは、自分たちの組の女性は優れており、相手の組の女性は劣っているという内容の歌が歌われる。歌でけなされる対象は、相手の組全体ではなく女性たちのみであり、女性同士の戦いであることがよく表れている。

昔からこのガーイーはスナヒチスーブの前後に１回ずつ、合計２回行われたとされる。今回の綱引きでも同じように２回行われた。

今回はイナグガーイーの時間が、スナヒチスーブの前も後も15分間ほどであったが、かつてはスーブ前のガーイーは１時間続いたとの話も聞けた。

ｃ.テービー合戦

今回、テービーはそれぞれの組によって製作されたが、持ち手はすべて実行委員会に属する南ヌ島保存会の青年たちが担当した。両組が主動してテービーガーイーをすると興奮して見境がつかなくなり、怪我をする恐れがあるため、冷静に対応できる実行委員会で行ったという。今回は、南ヌ島保存会のメンバーを、その個人が、本来属する組のテービー係として、両組へ８人ずつ配置した。

テービーは出番直前に火をつけられた。束

写真４－９ テービー合戦

ねられた竹の先が盛んに炎を上げ始めると、両組のテーピー係の青年たちが1束ずつ手に取り、炎を高々と差し上げ、手頃な間合いをとり対峙した。そしてブラ、太鼓、カネなどの音に合わせ、手に持ったテーピーを威勢よく上下させた。この時、「ヤッサイ、ヤッサイ」という掛け声が、かつてはあがったという。燃え盛る炎が上下に激しく動く様は、見ているものを魅了する。これがきっかけとなり、参加者全員の興奮の度合いが一気に増していくしていくように見える。

伊芸のテーピーガーイーでは、金武や並里のように、テーピーをぶつけ合うようなことは戦前から無かったという。また、戦前は、スナヒチスーブの前だけでなく後にも行われたとされ、綱引きの前日にも行われたこともあったという。

d.ワカス合戦

テーピー合戦を終えると、それまで地面に降ろしていた綱を再び担ぎ上げて、アガリ・イリ双方の綱のカマチグチを互いに近づけ合う綱寄せを行う。この時、綱の上のワカスは太刀や長刀などの武器を相手に向けて、互いに力を誇示する。これがワカス合戦である。

戦前は、ワカスは綱寄せの直前に綱に乗ったとされる。アガリ・イリともに、カマチを結合させる場所から20mほど手前で、ワカスを綱に乗せるために一旦綱を降ろし、ワカスを乗せて再び綱を担ぎ上げたとされる。綱寄せと同時に進行するワカス合戦を終えると、現在と同様ワカスは綱から降りたとされ、綱に乗ったワカスの姿を見られるのはおよそ20分間程度であったという。

ワカス合戦では、アガリのワカスは両手で長刀を高く差し上げ切っ先をイリに向け、イリのワカスは片手で太刀の切っ先をアガリに向け差し出す。この状態で、相手方のワカスとにらみ合い、かつ威厳を保ちながら、互いに寄せられていく綱の上でバランスを崩さな

写真4-10 ワカス合戦（アガリ）

写真4-11 ワカス合戦（イリ）

いよう踏ん張らなければいけないためワカスは大変な役目である。

e．綱合わせ

ワカス合戦を終えると、次はカマチを結合させる「綱合わせ」が行われる。雄綱のカマチを雌綱のカマチに挿し入れ、その雄綱のカマチにカマチボウを入れて、２つの綱をつなぎ合わせるのである。

綱同士をつなぐ際、両綱を中央に寄せて、すぐにカマチボウを入れるのではなく、担ぎ手たちが綱を上下させる。この動作をアギエーといい、その綱の動きから、「綱を踊らせる」とも表現する。今回、アギエーの時間は短かったが、かつてはもっと激しく長かったといわれる。ワカスはこのアギエーが行われる直前に綱から下りた。

今回は、雄綱が雌綱に寄っていくという形でカマチが入ったが、かつては、カマチ部分を上に立てている雄綱に、雌綱の方から上から覆いかぶさるように綱をつないだという。

４．スナヒチスーブ（綱引き勝負）

スナヒチの日には、日が暮れはじめる午後７時ごろには、伊芸の民家は全て留守になった。これは、綱引きに部落の全員が関わっていたことを示すエピソードとして今日に伝わるものである。

戦前、伊芸の綱引きには、ブラクヅナ（部落綱）とスニンヅナ（諸人綱）があったという。ブラクヅナはタシマ（他の部落）の人には絶対に引かさなかったという。スニンヅナはタシマからの見学者など、そこにいる者なら誰でも引いてよい綱引きであったという。

その年の綱引きをブラクヅナにするかスニンヅナにするかは、会議で決めたという。80代の話者によると、スニンヅナが行われたのは過去２回しかなく、実際に行われていたのは、ほとんどがブラクヅナであったという。

ブラクヅナの場合は、テービーを持った青

写真４－１２ 綱合わせ

年が綱引きの間、「チュヌシマンチョー、ウランガヤー（他の部落の者はいないか）」、「ムッチョーンドー（テービーを持っているぞ）」といいながら監視したという。もし、タシマの者が引いていれば、テービーを持つ手をポンと叩いて、その者の頭上で火の粉を落とすという制裁が加えられることになるのである。また、敵方から嫁に来たはずの女性が、親元の綱を引いているような場合にも、このような制裁があったという。また、タシマの人が入り乱れるスニンヅナの場合でも同様な監視が行われ、伊芸の人が自分の属する組と反対の組の綱を引いていれば、やはり制裁の対象となったといわれる。

スニンヅナの場合、自分たちの組が有利になるためのテービーを使った戦法があった。見物人はカマチの周辺に多く集まるため、綱引きの開始直前、青年たちがテービーを前方に突き出しながら、群衆をかき分けるようにして自分たちの綱に引き寄せるというものである。その後、すぐに綱引きが始まってしまうので、かき分けられた人々は、いや応なく近くの綱を引くことになるのである。

スナヒチスーブは、昔はカマチボウが入った瞬間に開始されたという。開始の合図などはなく、カマチ近くの引き手は、その瞬間「ヒャーッ、サー」という掛け声とともに、いきなり引き始め、カマチから遠い引き手は、カマチボウの動きを見はからって引き始めたという。また、開始の合図と同様、勝敗を決める審判などはなく、カマチボウが差し込まれた瞬間に綱を引き、その地点から、およそ2～3m引き寄せた組の勝ちになったという。引き始めから勝負がつくまでの時間は、おおむね15分ほどであったといわれる。

戦前の勝敗成績は、人口の多さを反映してブラクヅナは圧倒的にイリが強かったという。ある話者はアガリが勝ったのは1回だけ

写真4-13 スナヒチスーブ（イリ）

写真4-14 スナヒチスーブ（アガリ）

だったと話す。一方、スニンヅナになるとアガリの方が強かったとの話も聞けた。

今日では、ブラクヅナのようにタシマの人が参加することを許さないという厳しい制限は無くなり、同時にテービーによる監視・制裁も無くなった。

現在の綱引きは、小学生からお年寄りまでの伊芸区民全員、参加することになっている。

カマチボウが入った瞬間に引き始めるという習慣も、今日改められている。そのようなやり方では、カマチグチ近くにいる人が手を挟まれる危険性があるため、現在ではカマチボウを入れた後、外れないようしっかりと綱に縛って固定されることになったのである。この役目はカマチボウを製作する組の組頭と副組頭が担うことになっており、今回の綱引きでは、この役目をイリが務め、アガリの正副組頭はそれに立会い見届ける役目を果たした。

これに伴って、現在では、綱引き開始の合図は実行委員長が行うことになっている。舞台上の実行委員長が持つ白い旗が振り下ろされると同時に、スナヒチスープが始まるのである。また、カマチグチを中央の線から5m引いた組の勝ち、あるいは、綱が切れてしまった組の負け、というのが今日の勝敗の判定基準となり、それを審判長が判定することになり、決着のつけ方も様変わりした。

午後5時30分、カマチボウが綱に固定され、山城和徳審判長から準備完了の報告を受けた池原政文実行委員長が綱引き開始の旗を振り下ろし、満を持した両組が一斉に綱を引き始め、興奮が最高潮に達したのが同33分。その22秒後イリの綱が切れた。それを見届けた審判長が手にした白い旗をアガリの方へ振り下ろし、実行委員長がアガリの勝利を宣言したのが午後5時35分。これが今回のスナヒチスープである。

5．綱引き後の余興

以前は、綱引き終了後にシマ*が行われていた。地面に背中がついたら負けというルールで、かつてはアガリの綱打ち場が会場となったという。前回の綱引きの時にも区民グラウンドで行われたという。

はじめに、両組から決められた人数を出し合ってシマをとる。綱引きはだいたいイリが勝ったが、シマはアガリが勝つことが多かったという。一通り取組みが終わった後、「これからは他村の飛び入り」という合図とともに、他の集落からの出場者を募った。屋嘉や金武から次々と希望者が出てきたという。必ずしも、対伊芸ではなく、金武対屋嘉という試合もあった。戦前は午前3時頃まで続けられたといわれる。

今回の綱引きでは、区民グラウンドに設置した舞台で民謡ショーが行われた。

＊方言で沖縄角力（おきなわずもう）のこと。

6．祈願

(1)綱引きの安全祈願

旧暦6月25日は収穫を祝うカシチーという年中行事の日に当る。戦前は、この日に合わせて綱引きが行われていたとされる。この日は、稲の収穫を祝うと同時に、その副産物であるワラを利用した綱引きを通じて部落の共同体の絆を深める大切な日であった。

昔から、この日には綱引きの安全の祈願が行われていたという。今回の綱引きの祈願は、まず、綱引きの3日前に当るハタガシラ完成の日にカミヤーで執り行われた。カミヤーは公民館隣りにある拝所のことで、ヌールヤー、あるいはヌンドゥンチとも呼ばれる。カミヤーには酒と米が供えられ、綱引きの安全祈願と、新しいハタガシラの完成報告がなされた。

さらに、綱引き当日、ハタガシラのお披露目のミチジュネーに向かう前にも、実行委員長と池原良昭氏によってカミヤーに酒が供えられ、綱引きの安全が祈願された。池原氏は、伊芸区の祭祀儀礼を執り行う方である。

写真4－15 カミヤーでの祈願

綱引きの翌日、実行委員長によって「綱引きが無事に終わりました」という報告がカミヤーで行われ、綱引きに関する祈願が締めくくられた。

(2)六月カシチー

旧暦6月25日はウユミ（折日）とも呼ばれ、昔は各家庭で収穫を祝い、家族の健康を祈願する日であった。戦前まで、各家庭で大きな鍋を使いアカマーミーメー（赤飯）を炊き、握り飯を作った。それをユウナの葉で包み、この日に合わせて金武や屋嘉などから訪ねてくる親戚に与えたという。また、カボチャやシブイ（冬瓜）を具にした汁や、豆腐や昆布の煮付けなども作ったという。

ごちそうで祝うだけでなく、お昼には大盛りのご飯とおかずなどを仏壇に供えて、家族の健康とさらなる豊年を、祖霊に祈願していたという。綱引き行事へは、その祈願を終えてから参加したとのことである。

現在も、このような祈願が家によっては続けられている。

第５章 綱の処分と余談

１.綱の処分

綱引きが終わって後、役目を果たし終えた綱引きの綱は、その日のうちにグラウンドの隅に移動された。綱は毎年更新するもので、保管して綱引きの綱として再利用することは戦前から無かったといわれる。

かつては、田畑の肥料や牛の飼料や家畜小屋の敷き草にするため、綱を買い取る者もいたという。今回の綱は、伊芸区が肥料として用いるとのことである。

また、綱は家庭用の魔除けにも用いられる。かつては、綱引き終了後、縄を何本か持ち帰り、魔除けのために自宅の門に飾ったという。綱を持ち帰る光景は今回の綱引き会場でもみられ、昔ながらに門に飾る家もあった。

２.余談

(1)カーラザライ

かつては、綱引き当日の午前中にカーラザライが行われた。カーラザライとは、農業用水や洗濯場、水浴び場などに利用していた川を掃除することで、伊芸ではこの日、ミトゥクガー（美徳川）を掃除したという。綱作りは、カーラザライを終えて後、午後から始めたという。

カーラザライは、毎年、旧６月25日の作業で、綱引きの無い年にも行われた。綱引きの年は午後から綱引きの準備をしたが、綱引きの無い年は午後から普段の生活に戻ったという。

ミトゥクガーの清掃範囲は、現在の崎山酒造所から下流が中心で、川べりに生い茂ったアダンや竹を伐採したという。カーラザライの目的は川の氾濫防止である。大雨によって川が氾濫すると、アガリの綱打ち場まで水が押し寄せることもあったという。さらに、川を掃除すると水も綺麗になり、五穀豊穣につながるという考えもあったといわれる。

この作業には、ほとんどの男女が参加することになっていたという。共同作業なので、この時点でアガリとイリに分かれることはなかったという。このような集落の人々が総出で行う奉仕作業をシチャグナ、またはスーンジブーという。

カーラザライが何年前まであったのかは分からないが、前回の綱引きには無かったという。

(2)料理

綱作りや旗の製作などの準備にたずさわる方々には、両組それぞれで作った昼食や夕食、おやつなどの食事が出された。綱引きの準備期間、または当日における食事は両組がそれぞれ作った。

両組とも十数人の婦人方が料理の作り手となった。アガリは３人の女性班長が中心となって、30～40代の女性約15人によって、

カレー、お握り、豚汁などの料理が作られた。

イリも同じく30～40代の女性15人ほどで、平日の夕食を、土日は昼食と夕食を、それからおやつなどを作った。料理の内容は、沖縄ソバ、カレーライス、ソーキ汁、お握りなどであった。戦前は酒のみが供されたという。

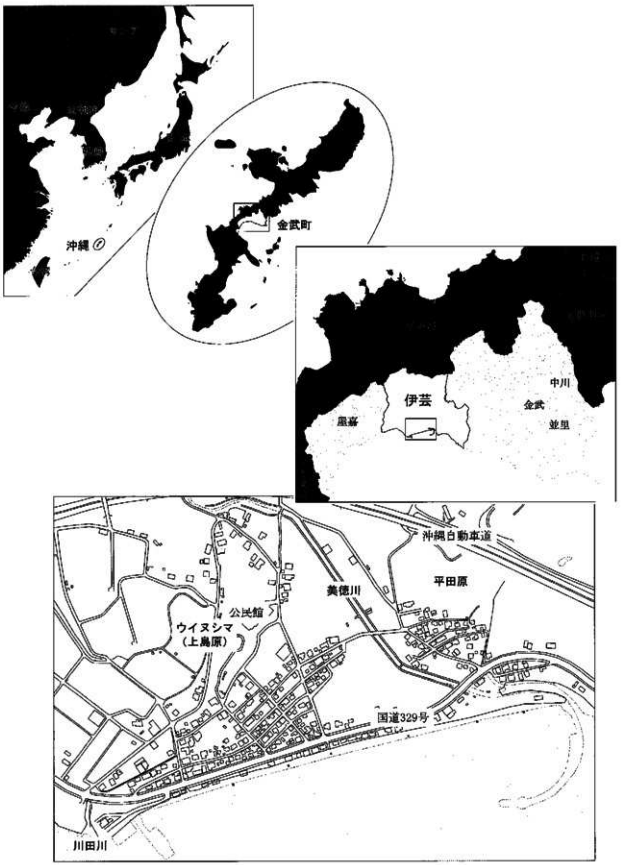
また、実行委員会では、網引き当日の懇親会での料理を作った。ソーキ汁やお握りなどが参加者や見学者に振る舞われた。

(3)参加者

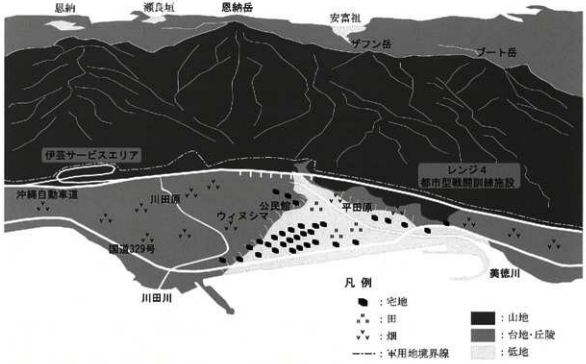
今回、網引きの準備から当日までに何らかの形で参加した伊芸区民は約600人で、網引き当日は見学者を含めて、約800人の方々が集まった。

「伊芸のスナヒチ」資料集

資料1 伊芸の位置（詳細図）

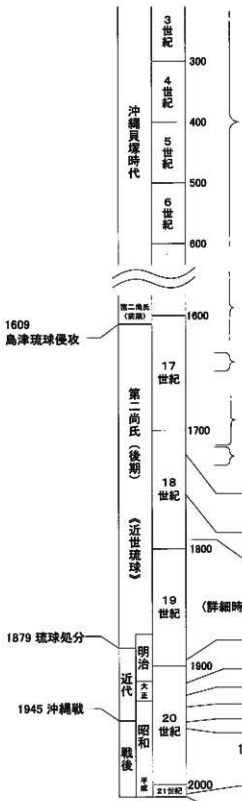


資料２ 伊芸の地勢（航空写真との対照）



注：「山地」「台地・丘陵」「低地」の地形区分は厳密なものではなく、大まかな区分である。

資料3 伊芸の歴史年表



3～6世紀頃　海岸部に集落が展開
伊芸遺跡、親田原遺物散布地、シッチ原遺物散布地

17世紀始め頃　この頃までには、内陸部に集落が展開
伊芸古島遺跡、伊芸部落鍛冶屋跡

17世紀半ば頃　「琉球国高究帳」「絵図郷村帳」に「いけ村」の記載
「平田村」は、この当時すでに存在していなかったと記載

18世紀初め頃　この頃までには、伊芸ノロが置かれる

1713 1731　「琉球国由来記」「琉球国旧記」に伊芸の御嶽や川について記載

1720　山里和尚墓碑「大清康熙59年 權大僧都法印顕宥正位 庚子十月二十二日去」

1754　「伊藤愿嘉二ヶ村美里間切山筆者構、津口出入之船浦懸之船相改候事」（「近世地方経済史料第9巻」）

1792　「球陽」に伊芸村の川田原への村の移転願いの記載

近世（詳細時期未詳）　伊芸の住人が違法所持しているクリ船を没収し、払い下げることを記載（「近世地方経済史料第9巻」）

1895　北白川宮能久親王が立ち寄られたとされる場所が「親王森」として伝承

1913　字事務所（村屋）を建設

1922　共同店の設立・村道の開削工事着手

1932　親田原等の耕地整理着手

1947　戦後初の網引き

1954　カミヤー（神屋）を建設

1960頃～現在　流弾、砲弾破片落下、爆音、照明弾落下など米軍演習の被害が頻発

2005　都市型戦闘訓練施設で訓練始まり、演習強行に対する緊急抗議県民集会

2006　伊芸スナヒチ16年ぶりに挙行

資料4 アガリ・イリの組織（役割と担い手）

	名　称	役　割	担 い 手
	組　頭	・組の総括者	歴代区長等の適任者
	副組頭	・組頭の補佐	適 任 者
	会　計	・会計の担当者	適 任 者
準備段階の係	綱打ち係 ※1	・綱打ち	区民全員
	トゥールパタ製作係 ※1	・トゥールパタの製作	物作りの得意な人
	応援旗製作係 ※1	・応援旗の製作	希望者・適任者
	テーピー製作係	・テーピーの製作	適 任 者
ミチジュネーのときの係	トゥールパタ係 ※1	・ミチジュネーでのトゥールパタの持ち手 ・トゥール旗によるガーイー	青年男性
	ワ カ ス	・組踊の登場人物の衣裳で綱の上に立ち、綱引きのシンボル的な役割を担う	男子中高生
	囃 子 係	・ブラ、カネ等の楽器演奏の係	経験者・適任者
	綱合わせ係	・カマチの結合のときの安全を確認する係	組頭・副組頭が兼任
	ガーイー係（男）	・テーピーによるガーイー	青年男性
	ガーイー係（女）	・歌、踊り、太鼓によるガーイー	女　性
	安 全 係	・ミチジュネーの安全を確保する係	適 任 者
雄綱側の係 ※2	カマチ棒製作係 ※1	・カマチ棒の製作	大工経験者等
	カマチパン	・ミチジュネーでのカマチ棒の持ち手 ・カマチ口にカマチ棒を挿入する	体格の良い力持ちの男性
その他	炊 事 係	・準備や本番の参加者への食事等を作る係	女性、適任者・希望者

注　※1：組織上の正式な名称は特につけられていなかったため、便宜上名称をつけた。
※2：カマチ棒に関する役割は、雄綱側にのみある係で綱引きが行われる度に、綱の雌雄と同様、東西で交替している。

資料5　実行委員会会則

伊芸スナヒチ実行委員会会則

第1章 総則
(名称)
第1条 本会は、伊芸スナヒチ実行委員会（以下「委員会」という。）と称する。

(事務局)
第2条 委員会の事務局は、伊芸区公民館内に置く。

(目的)
第3条 委員会は、伊芸スナヒチを開催することを目的とする。

(事業)
第4条 委員会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。
（1）伊芸スナヒチに関する計画調整及び推進に関すること。
（2）その他、伊芸スナヒチを実施するために必要な事項に関すること。

第2章 組織
(組織)
第5条 委員会は、委員長及び委員をもって組織する。
2 委員長は、伊芸区公民館長をもって充てる。
3 副委員長は、行政委員会議長をもって充てる。
4 委員は、次に掲げる者をもって充てる。
（1）区内各種団体代表　7名
（2）行政班長　5名
（3）東西組関係者　4名
（4）精通者　若干名

(役員の嘱託)
第6条 常任委員は、委員のうちから、それぞれ委員長が委嘱する。
2 監事は、伊芸区監査委員を会長が委嘱する。

(役員の職務)
第7条 委員長は、委員会を代表し、会務を総理する。
2 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときは、その職務を代理する。
3 常任委員は、常任委員会を構成し、本会の運営のために必要な事項を審議する。
4 監事は、財務を監査する。

(任期)
第8条 委員及び役員の任期は、それぞれの属する機関及び団体における役職に就任している期間に限るものとする。

第3章 会議
第10条 総会は、委員長及び委員をもって構成する。
2 総会は、委員長が招集し、議長となり、次の事項を審議し、決定する。
（1）実施運営の基本方針に関すること。
（2）事業計画に関すること。
（3）予算及び決算に関すること。
（4）会則の制定及び改廃に関すること。

（5）常任委員会への委任に関すること。
（6）その他重要な事項に関すること。
3　総会の議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

（常任委員会）
第11条　常任委員会は、常任委員をもって構成する。
2　常任委員会は、次の事項を審議し、決定する。
（1）総会から委任された事項に関すること。
（2）総会を招集するいとまがない場合における緊急な事項に関すること。
（3）その他委員長が必要と認める事項に関すること。
3　常任委員会は、前項第2号及び第3号の規定により、審議決定したときは、これを次の総会に報告しなければならない。
4　前条第3項の規定は、常任委員について準用する。
5　常任委員会に関し必要な事項は、委員長が別に定める。

第4章　委員長の専決処分
（委員長の専決処分）
第12条　委員長は、総会及び常任委員会（以下本条において「総会等」という。）の権限に属する事項のうち、会議を招集するいとまがない場合における緊急な事項については、これを専決処分することができる。
2　委員長は、前項の規定により専決処分をしたときは、これを次の総会等に報告し、その承認を求めなければならない。

第5章　委員会及び常任委員会
（委員会及び常任委員会）
第13条　委員会は、第3条の目的を達成するために、必要に応じ、委員会及び常任委員会を置くことができる。

第6章　事務局
（事務局）
第14条　委員会の事務を処理するため、事務局を置く。
2　事務局に関し必要な事項は、委員長が別に定める。

第7章　会計
（会計）
第15条　委員会の経費は、補助金及びその他の収入をもって充てる。

（会計年度）
第16条　委員会の会計年度は毎年4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。

第8章　補則
（委任）
第17条　この会則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員長が別に定める。

附　則：この会則は、平成18年5月22日から施行する。

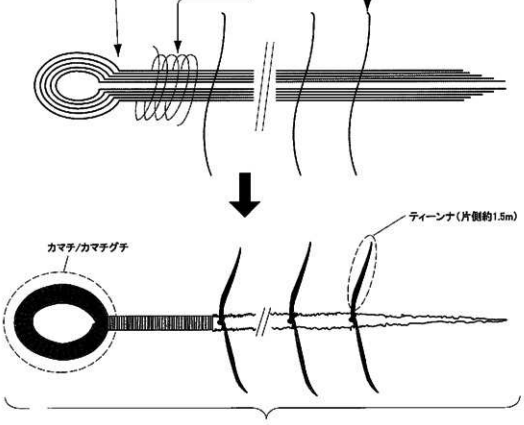
資料6 綱作り

	綱打ち場		各世帯
作業	クワーンナ作り	縄作り	縄作り
担い手	壮年男性	年輩者など	全 戸
製作数量	ホンヅナ用 90m 5本 / ティーンナ用 6m 25本	全戸提出の縄の不足分	1戸あたり10尋

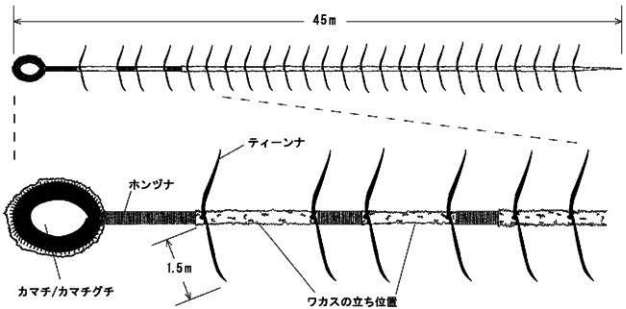
90mのクワーンナ5本を半分に折り返し、1本に束ねてホンヅナとする

縄でホンヅナを束ねる

6mのクワーンナを1本ずつホンヅナに結びつけティーンナとする

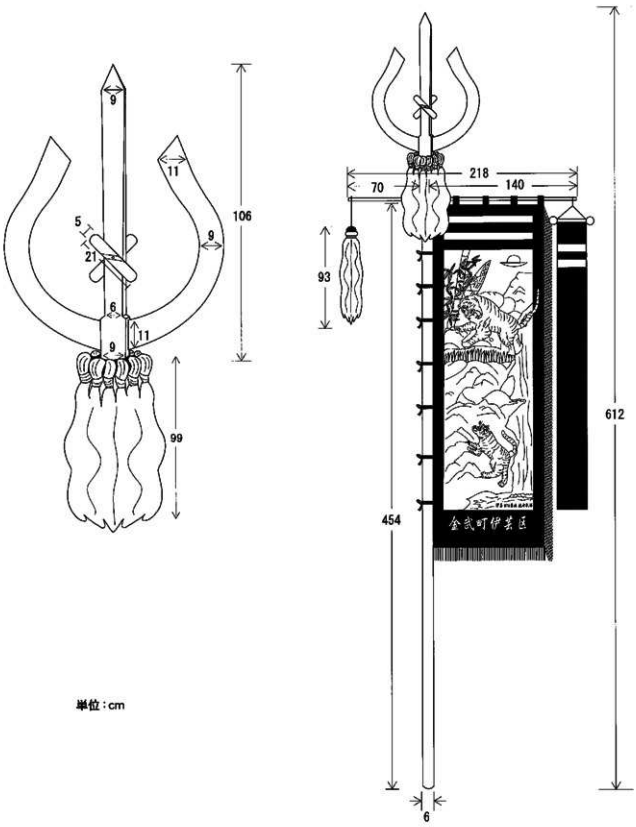


資料7 綱と綱合わせ



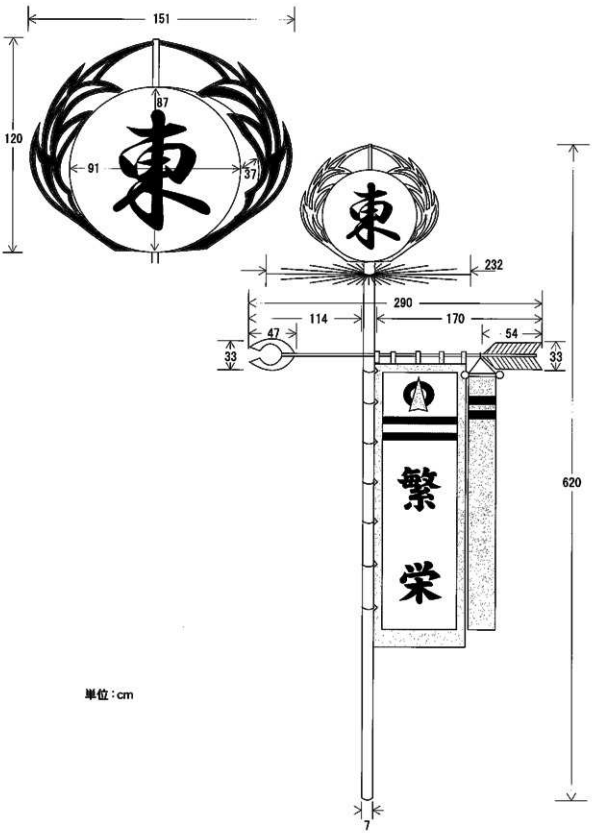
注：綱の図は飾りのある東組の綱をモデルとした。

資料8 ハタガシラ（詳細図）

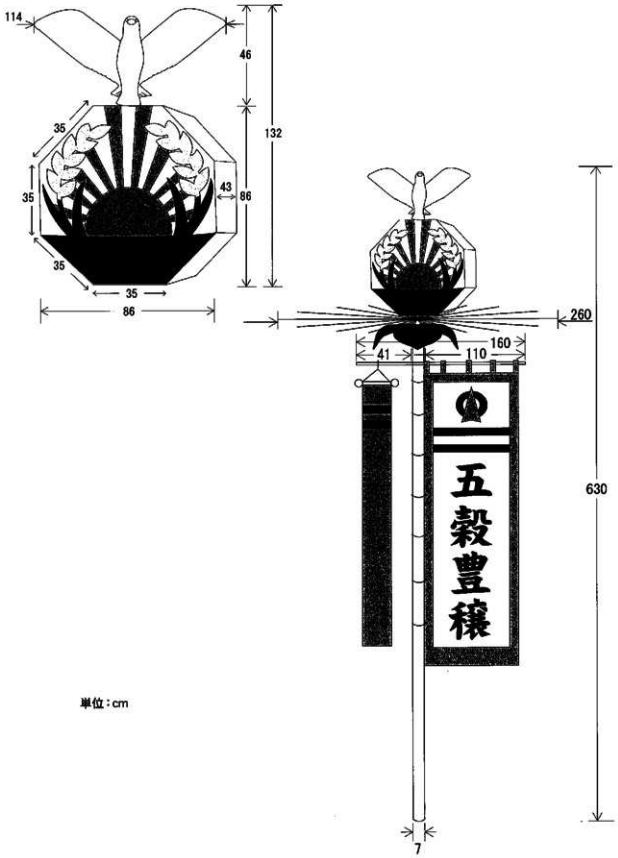


単位：cm

資料9 アガリのトゥールバタ（詳細図）

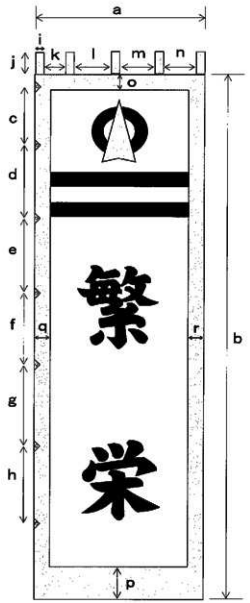


資料 10 イリのトゥールバタ（詳細図）



単位：cm

資料11 アガリ・イリの旗（詳細図）



東

西

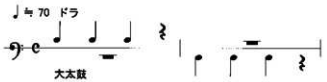
a: 100	g: 43	m: 20
b: 300	h: 43	n: 17
c: 35	i: 5	o: 10
d: 43	j: 20	p: 13
e: 43	k: 17	q: 10
f: 43	l: 20	r: 10

単位：cm

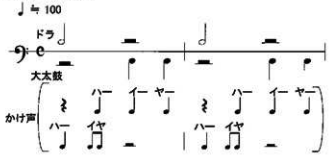
資料 12 ミチジュネーのルート（戦前と現在）

資料 13 ミチジュネーの囃子（詳細）

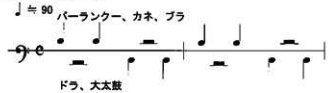
譜例 1　ミチジュネー出発前の囃子



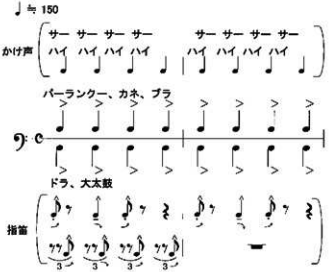
譜例 2　ミチジュネーの囃子 1



譜例 3　ミチジュネーの囃子 2



譜例 4　ミチジュネーの囃子 3



注 1）ミチジュネーで実際に演奏された囃子のうち、代表的なものを採譜した。
2）上声部と下声部で楽器のパート分けをしたが、これは便宜的なもので、実際には比較的自由にパートを入れ替えて演奏される。
3）採譜した 2 小節が繰り返し演奏される。

資料 14 綱引き歌の歌詞

1. イリトゥアガリトゥヤ　ウフジムティーチヤシガ
　　チナフィキヌユルナティ　ウフジムカワティ

2. イナグングゥナシヤ　イリヌ／アガリ　ユミナスナ
　　カータガー／ミトゥクガー　ヌミヅヌ　ユナジクササ

3. イリヌ／アガリ　アングゥタヤ　ジンブヌヤネラン
　　カタハラニイチョティ　サミルカツル

4. アガリ／イリヌ　ユミナトティ　イリヌ／アガリ　カシースシヤ
　　アカタムイヌブティ　カジニムマシ

5. イリヌ／アガリ　アングゥタヤ　スンブヌハナグクロ
　　ヒルヤウシスクリ　ユルヤタツサ

6. イリヌ／アガリ　アングゥタヤ　ワタクンゾマガテ
　　アガリ／イリヌ　アングゥタヤ　チムヌマクト

7. イリヌ／アガリ　ユムミチヤ　ギツツバヌクササ
　　アガリ／イリヌ　ウフミヤ　ハナヌカバサ

8. イリヌ／アガリ　アングゥタガ　グニンユテチャンテ
　　アガリ／イリヌ　アングゥタヌ　ツイニカネミ

9. マキタラワシンキ　カッチャラユティクー
　　アングゥーターヤーサーシンチー　ハーユール

10. チナフィキンマカチ　シマントゥイマカチ
　　ウシルカルガルトゥ　イキヨドゥシグゥ

1.「西と東とは、気持ちは一つだが、綱引きの夜は二つに分かれる」という意味の歌で、両組のガーエーの最初に歌われる。

2.「女の子が生まれたら、敵方の嫁にするな、敵方の川の水はユナジくさい」という意味である。ユナジとは米のとぎ汁のことで、かつては石鹸の代わりとして使ったという*。これに衣服を浸けて晒す場所がアガリは美徳川、イリは川田川であった。とぎ汁は4～5日経つと腐臭を放ったという。その時の臭さを表した歌である。

3.「敵組の女性たちは、知恵がない、傍らに座って、体を掻いている」という意味である。相手の格好悪さを歌っている。

4.「こちらの嫁に来たのに、敵組の加勢をする女性は、森の風にあてておけ」という意味である。結婚して出身と異なる組に嫁いできたにも関わらず、綱引きになると親元の組を加勢する女性たちがいたことがうかがえる。

5.「敵組の女性たちの心は、カボチャの花のよう、昼は仕事もせずに眠って、夜は元気に起きている」という意味である。カボチャの花びらが折れ曲がっている様子にたとえているとされる。

6.「敵組の女性たちは根性が曲がっている、こちらの女性たちは素直である」という意味である。

7.「敵組のお嫁さんはゲッキツの臭さ、こちらのお嫁さんたちは花の香りがする」という意味である。

8.「敵組の女性たちが例え5人あつまっても、こちらの女性の1人にも適わない」という歌である。

9. 綱引きの決着後に勝者に歌われる歌とされる。意味は確認できなかった。

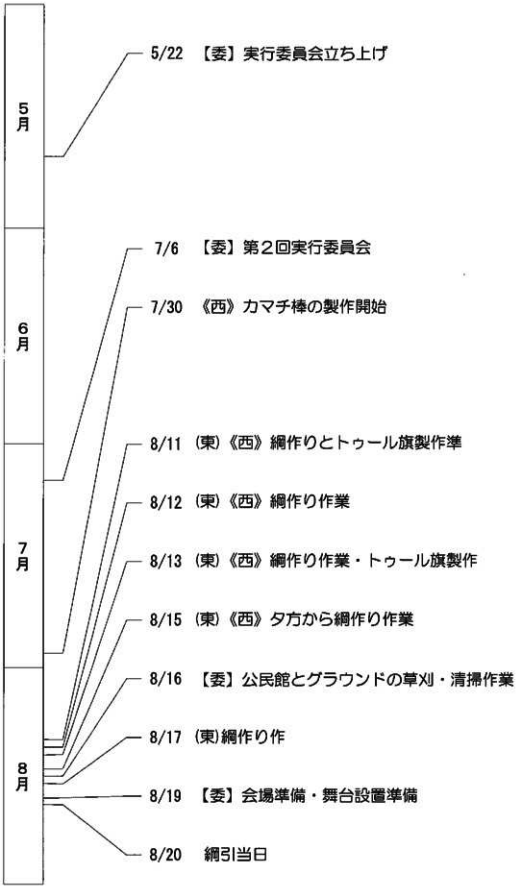
10. この歌は、ガーイーの最後に持ってくると決まっている。綱引きに勝った組だけが歌うことができる歌である。「綱引きに勝って、角力にも勝って、意気揚々と帰れよ、友よ」という意味がある。かつては、角力が終わるのは午前3時頃であったという。

ガーイーには以上のような歌詞がある。東西が歌う歌詞の内容はほぼ同じで、主語が入れ替わるだけである。

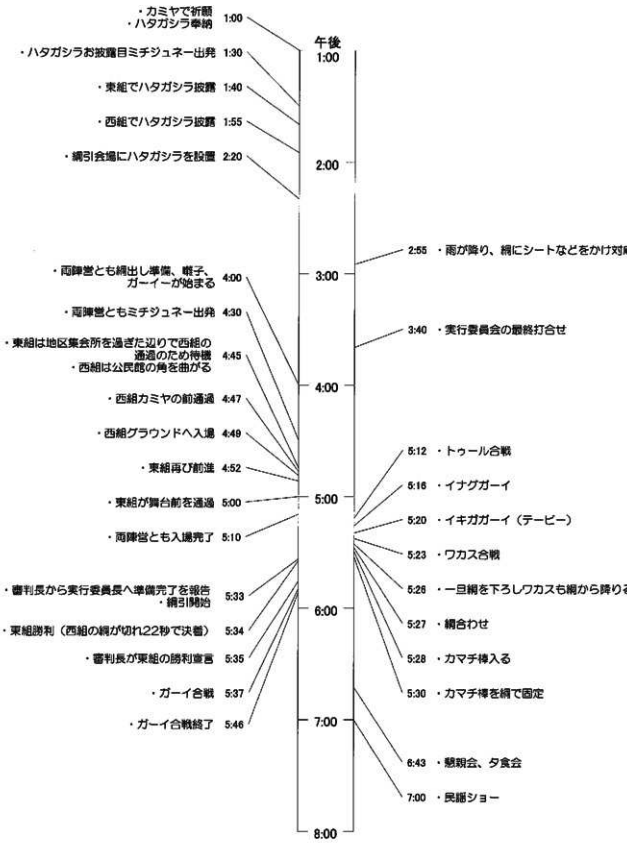
これらの歌詞は、昭和58年刊行の『村の記録』や、練習用に配布されたプリントに記載されているものであるが、9番の歌詞は今回の聞き取り調査により確認できたものである。

＊ 聞き取り調査では石鹸という話が聞けたが、一般には布を晒すと同時に柔らかくするために漬ける液のことで、米の粉に水を加え、さらに粥を加えて発酵させて作ったものが「ユナジ」といわれる。

資料15 当日までのスケジュール



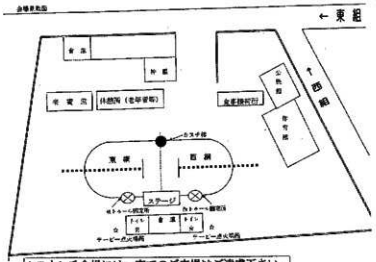
資料 16 当日のスケジュール



伊芸スナヒチ(綱引き)

日　時：平成18年8月20日（日）
場　所：伊芸区民グラウンド
主　催：伊芸スナヒチ実行委員会

＊午後4時30分に、東組：がじまる広場
西組：ゲートボール場下にお集まり下さい。



＊スナヒチ会場には、車でのご来場はご遠慮下さい。
＊当区出身で、他地域に在住の方への参加呼びかけもお願いします。
＊スナヒチにお出かけの際は、戸締りに充分お気をつけ下さい。

ごあいさつ

伊芸スナヒチ実行委員会　委員長　池原政文

残暑なお厳しい折、皆様にはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

「明るく住みよい豊かな地域づくり」を目的にした当区の伝統行事「伊芸スナヒチ」が8月20日に開催されます。

伊芸スナヒチは五穀豊穣の祈願、区の繁栄を願う行事として戦前から受け継がれて来ましたが、平成2年に実施して以来16年ぶりとなる今回の開催は伊芸区民の一致団結と融和を図ることを再確認し、歴史と伝統を次世代に継承させていく区民総参加の最大イベントです。

この度の行事を挙行することができますことは、区民の団結と協働の賜ものであり、ご尽力いただいている東西両陣営の役員関係各位に心から感謝申し上げます。

行事当日は、他地域在住のシマンチュにも呼びかけていただき、盛大に挙行する所存でありますので、多くの皆様がご参加下さりスナヒチを盛り上げ楽しんでいただきますよう心からお待ち申し上げております。

平成18年8月吉日

8/20（日）　スナヒチ　プログラム	
午後4：30	東西陣営出発（道ジュネー）
午後5：00	東西競入場
午後5：20	トゥール合戦　　ガーイ・テービー
午後5：40	若衆（ワカス）合戦及び綱寄せ
午後6：00	綱引き
午後6：20	ガーイ・テービー
午後6：40	綱　移　動（参加者全員）
午後7：00	懇　親　会（夕　食） 民謡ショー　・　皆で踊ろう（婦人会）

＊午後1時より、伊芸区旗頭のお披露目を神屋、東西両陣営で行ないます。

資料 18 新聞掲載記事

16年ぶりスナヒチ

金武町伊芸区 平和願い区民団結

琉球新報 平成 18 年 8 月 21 日 朝刊

スナヒチ16年ぶり復活

区民熱狂 綱引き継承へ

金武町伊芸

沖縄タイムス 平成 18 年 8 月 23 日 朝刊

参考及び引用文献

【編著者名・書名・刊行年(西暦)・発行者の順で記載】

安富祖一博『村の記録』1983
池原弘『私の金武方言メモ』2004
岡村トヨ『金武くとぅば』1994
金武区誌編集委員会編『金武区誌 上巻』1994 金武区事務所
並里区誌編纂委員会編『並里区誌 戦前編』1998 並里区事務所
屋嘉区誌編纂委員会編『屋嘉区誌(戦前編)』2005 屋嘉区事務所
津波高志『金武町の村落と聖地 －伊芸区の場合－』1991 金武町教育委員会
『金武町と基地』編集委員会編 『金武町と基地』1991 金武町
金武町教育委員会編『金武町文化財調査報告第1集金武町の遺跡－遺跡詳細分布調査報告－』1990 金武町教育委員会
金武町史編さん委員会編『金武町史 第1巻 移民編』1996 金武町教育委員会
金武町史編さん委員会編『金武町史 第2巻 戦争編』2002 金武町教育委員会
金武町誌編纂委員会編『金武町誌』1983 金武町役場

沖縄県沖縄史料編集所編『沖縄県史料 前近代1 首里王府仕置』1981 沖縄県教育委員会
沖縄県教育庁編『沖縄県文化財調査報告書第143集 沖縄の網引き習俗調査報告書』2004 沖縄県教育委員会
琉球国絵図史料集編集委員会編『琉球国絵図史料集 第2集 －元禄国絵図及び関連史料－』1993 沖縄県教育委員会
宜野湾市教育委員会編『市民民俗芸能調査報告書 競んで知るぎのわんの網引き』2005 宜野湾市教育委員会
北谷町教育委員会編『北谷町文化財調査報告書第19集 北谷町の網引き』2000 北谷町教育委員会
南風原町史編集委員会編『津嘉山大綱曳き調査報告書』1994 南風原町教育委員会
与那原大綱曳資料集編集委員会編『与那原大綱曳』2005 与那原町教育委員会

沖縄大百科事典刊行事務局編『沖縄大百科事典』1983 沖縄タイムス社
小野武夫編『近世地方経済史料 第9巻』1958 吉川弘文館
「角川日本地名大辞典」編纂委員会編『角川日本地名大辞典 47 沖縄県』1986 角川書店
球陽研究会編『沖縄文化史料集成5 球陽 読み下し編』1974 角川書店
国頭郡教育会編『沖縄県国頭郡志』1919 沖縄出版会
田名真之『南島地名考 －おもろから沖縄市誕生まで－』1984 ひるぎ社
津波高志他 『沖縄国頭の村落《下巻》』1982 新星図書出版
日本エディタースクール編『標準編集必携』1987 日本エディタースクール出版部
東恩納寛惇『南島風土記』1950 沖縄郷土文化研究会
平凡社地方資料センター編『日本歴史地名大系第48巻 沖縄県の地名』2002 平凡社
横山重編『琉球史料叢書 第2巻』1940 風文書館
横山重編『琉球史料叢書 第3巻』1940 風文書館

金武町の歴史と文化 第3集

伊芸のスナヒチ

発 行 年2008年(平成20年)3月
編集・発行 金武町教育委員会
〒904-1293 沖縄県国頭郡金武町字金武7758番地
TEL 098(968)8996 <社会教育課>
印 刷 株式会社平山印刷
〒901-1111 沖縄県南風原町字兼城270-1
TEL 098(889)8748

Copyright (C) 金武町教育委員会 2008 All Rights Reserved. Printed in Japan.